中村裕先生を偲ぶ

世に、身心障害者（児）に、
あっても
仕事に、障害は
あってはならない

太陽光は働くものは
被護者ではなく
労働者であり
後援者、投資者である

常に先

行く癖持ちて

寿々せり

示羊

中村先生、安らかに

社会福祉法人太陽の家理事長　畑田和男

真夏の太陽がぎらぎらと照りつける別府湾にモーターボートを走らせ、真冬の雪原をジープで駆けぬけていた中村先生……。その先生がこんなに早く亡くなられることを誰が予測できたでしょうか。昭和五十九年七月二十三日は、私にとって生涯忘れられない日となってしまいました。

先生は社会福祉に対する情熱と実行力で他人がまねることのできない事業をやってこられました。今年四月は、愛知太陽の家創立、第一回国際身体障害者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会、中国、ニュージーランド出張と多忙を極めておられましたが、ご自分の身体の不調を決して表に出さず、障害者の為に力をふりしぼられていた姿は、身近にいた私には、神のごとく感じられました。

先生の笑顔、やさしい眼差し、猫背気味で歩かれていた姿にお目にかかることはないと思うと、涙が浮かんできます。七月二十日、ご自分の余命を察せられたか、私を呼び「俺の命は限界に来たようにある。今後のことは頼む」と手を取り、悲痛な面持ちで言われましたが、このことが昨日のことのように思い出されます。

私は先生に師事して二十四年になります。先生は時には父、また兄でもあり、医学のことはもとより、身障者の福祉など限りなくご指導下さいました。別府整肢園長を兼任された頃より、太陽の家の設立に本格的に取り組み、日夜の区別なく仕事に励み、様々な困難を乗り越えて、今日の太陽の家の基礎を築かれました。しかし、今回の病気はこの時期にすでに始まっていたのです。

太陽の家は、来年創立二十年になろうとしていますが、この間万事順調に進んだわけではありません。先生の不屈の信念と行動力で、率先して難事を解決し部下を先導されたのです。

七月二十二日夜より、私は先生の枕元で一夜を過ごしたのですが、二十三日早朝、突然息を引き取られました。安らかな、少し微笑みさえ感じられるお顔は、み仏そのものでした。

太陽の家が日本だけではなく、世界の太陽の家となった今、先生のご遺志を継ぐことは、我々の重大な責務であることを自覚しなければなりません。このことは、先生に対する最大の供養ではないかと思います。

職員一同、初心に帰り、懸命に頑張っています。先生、どうか見守って下さい。どうぞ安らかにお眠り下さい。心からご冥福をお祈り致します。

身障者と共に歩いた二十五年間

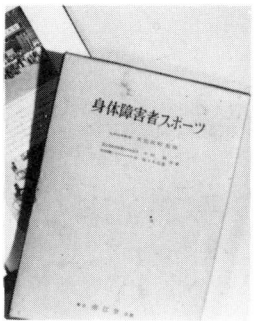
太陽の家の歩みと中村先生の足どり

東京パラリンピック決まる
＝来年11月8日から5日間＝
中村医長へ朗報
国立別府病院 障害者スポーツ育ての親

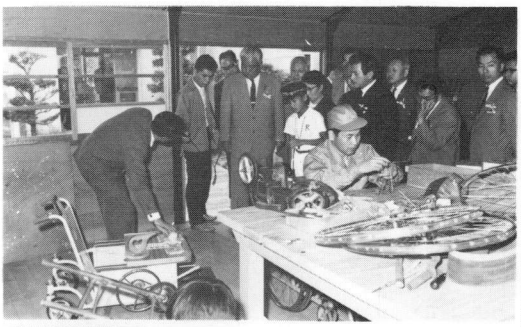
希望に燃えて…
太陽の家ひらく
社会復帰の願いも新たに
海外からも祝電
さっそく作業を始める

2年3月	大分県別府市で誕生（31日）
14年3月	別府市立野口尋常小学校卒業
20年3月	大分県立大分中学校校卒業
26年3月	九州大学医学専門部卒業（25年特待生）
27年4月	九州大学医学部整形外科医局入局
10月	医師免許取得（第一四五八八五号）
32年11月	医学博士号取得（九州大学より）
33年11月	国立別府病院整形外科医長（～44年7月）
34年3月	結婚
35年4月	厚生省技官としてストークマンデビル病院（イギリス）で研修、グットマン博士の教えにより以後の生涯に大きな影響を受ける。
36年6月	大分県身体障害者体育協会副会長（50年会長）
10月	日本初の身体障害者スポーツ大会、第一回大分県身体障害者スポーツ大会開催（大会副会長）
37年7月	第11回国際ストークマンデビル競技大会（ＩＳＭＧ）日本選手団団長
39年10月	社会福祉法人別府整肢園園長（～42年8月）
11月	東京パラリンピック（第13回ＩＳＭＧ）日本選手団団長
40年6月	水上勉氏の支援で太陽の家東京事務所開設
9月	小野田セメント㈱と土地建物売買契約成立
10月	第1回全国身体障害者スポーツ大会参与
10月	太陽の家開所（5日）7名で竹工、和式車いす義肢補装具の製作を行う
41年2月	社会福祉法人認可（3月登記、4月身体障害者授産施設指定―定員34名）
3月	社会福祉法人太陽の家常務理事
9月	第1工場、宿舎、食堂、浴場他、完工
10月	天皇皇后両陛下行幸啓
11月	皇太子殿下ご夫妻行啓
11月	印刷科（㈲電子印刷センター）創業
12月	大分中村病院開院
42年5月	木工科（早川電機㈱）、クリーニング科（綿久寝具㈱）創業

▲太陽の家の産声、ビスカーディ氏と語る



▲ドクトル・中村



▲設立当初の太陽の家

▲初の渡英、グッドマン博士に師事

▲日本から初めてＩＳＭＧに選手を連れて行く（S.37）

太陽の家"5歳"祝う

総合ビルも完成して

車イスの市議誕生

大分合同新聞

別府市の吉永さん 全国初めての快挙

50.4.28

車イスごとかかえあげられる吉永新市議。

43年2月　大分県社会福祉審議会委員
2月　身体障害者労働研究室開設
3月　3階建宿舎、体育館、完工
4月　社会福祉法人太陽の家理事長
財団法人日本身体障害者スポーツ協会評議員
（56年常務理事）
9月　身体障害者の雇用促進協力により、労働大臣表彰受賞
10月　第2回パラリンピック（イスラエル）日本選手団団長
11月　常陸宮殿下ご夫妻ご視察
12月　イギリス各施設視察

44年1月　リハビリテーション、インターナショナル（RI）補装具、住宅、交通機関委員会（ICTA）委員
2月　プラスチック科創業
4月　日本リハビリテーション医学会評議員

45年4月　大分県医師会労災審議室委員
4月　スペトラーエンスキード（スウェーデン）視察
10月　金工科（㈱田島製作所）創業
12月　四肢マヒ者用モデル住宅（テトラエース）完工

46年4月　本館鉄筋6階建完工
6月　重度身体障害者授産施設指定（定員83名）
7月　グッドウィルインダストリーズ（アメリカ）のアジアリハビリテーションセンターに指定される
10月　社会福祉法人大分県社会福祉事業団理事

47年2月　オムロン太陽電機株式会社副社長（53年6月取締役社長）
4月　福祉工場創業（定員50名）
7月　第3回パラリンピック（西ドイツ）日本選手団団長

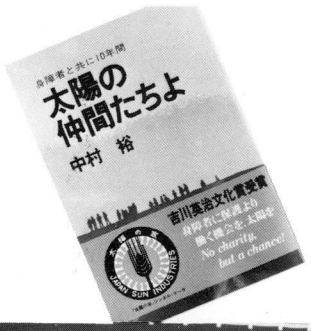
48年3月　全太陽自治組織「むぎの会」発足
5月　脳性マヒ対策のためセンターインダストリーズ（オーストラリア）視察
11月　アメリカ、アラバマ州名誉陸軍中佐に任命される

49年1月　明野中央病院開院
1月　大分県心身障害者対策協議会委員
4月　日本臨床整形外科医会大分県代表
4月　大分県整形外科医会副会長
4月　大分県心身障害者雇用促進協会副会長

50年1月　労働省リハビリテーション研究会委員
4月　企画広報室長吉永栄治（車いす使用）別府市議会議員に当選
6月　第1回極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会（フェスピック、大会副会長）。一部太陽の家で開催。皇太子ご夫妻、グットマン博士（イギリス）来訪。この後、フェスピック基金を設立し

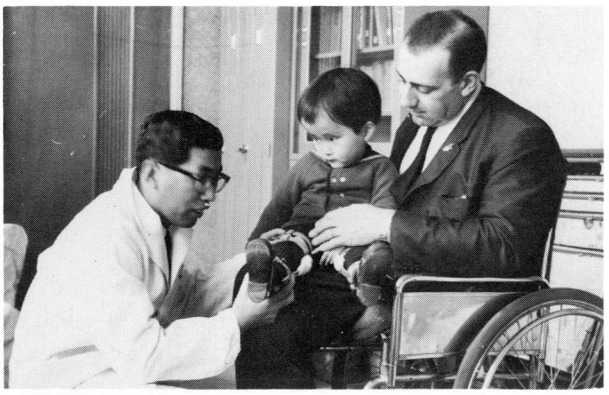
▲福祉工場設立祝賀会で立石一真会長と

▲天皇、皇后両陛下行幸啓（S.41）



▲R.I.事務局長ノーマンアクトン氏来訪

▲合同結婚式、秋山ちえ子女史と仲介役



▲別府整肢園々長時代

毎日新聞 55.3.12

脊髄損傷者のための手引書

車イス生活にリハビリ手引書

別府大、中村理事長が中心に

主治医がわりに

脊髄損傷者に日常の注意

西日本新聞 52.12.12

"社会復帰"にぎわう

身障者スーパー開店

別府大の家

大忙し、車イスのレジ係

一般客も笑顔で買い物

大分合同新聞 昭和52年(1977年)12月7日 水曜日

"フェスピックの心"ここに

生みの親

中村さんがお手本

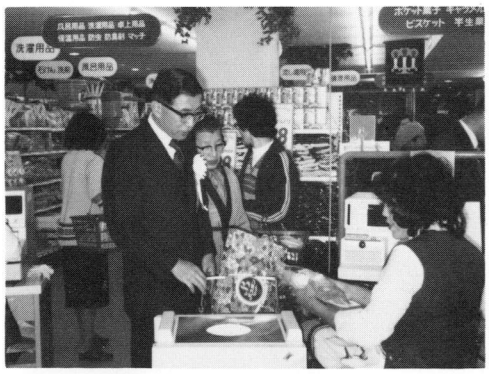
旅券から費用まで引き受けて

ネパールの少女

両足手術に成功

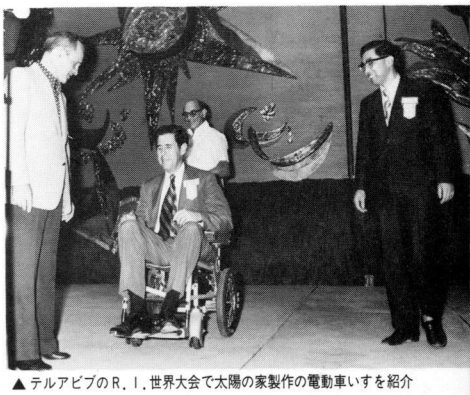
両足の手術が成功、喜ぶのラクスミさんと中村医師（大分市の大分中央病院で）

1951年
3月 発展途上国の本大会参加促進を図る
6月 著書「太陽の仲間たちよ」講談社より刊行
11月 RI事務総長ノーマン・アクトン氏来訪
12月 インドネシア研修生2名受け入れ
11月 社会福祉法人身体障害者自立情報センター（東京）理事長
6月 第8回RI世界大会（テルアビブ）出席（電動車いす展示）
7月 大分県福祉のためのまちづくり懇談会委員
7月 第3回パラリンピック（カナダ）日本選手団団長
11月 フォーカス運動のブラットゴード氏（スウェーデン）講演会開催
52年
1月 第4回RIアジア汎太平洋地域総会（バンコク）出席
3月 日本整形外科学会評議員
5月 ヘッドドルプ創立者クラップワイク博士（オランダ）講演会開催
6月 スリランカ研修生受け入れ
8月 トンガ研修生2名受け入れ
9月 皇太子殿下謁見
11月 第2回フェスピック大会（オーストラリア）日本選手団団長
11月 ネパールの身障少女に義足製作協力
12月 スーパーマーケット〝サンストア〟開店
53年
1月 西日本整形災害外科学会評議員
株式会社サンインダストリー代表取締役社長（59年9月、ソニー・太陽株式会社に社名変更）
1月 太陽の家讃歌（中村裕作詞）他、発表
7月 第27回ISMG（イギリス）日本選手団団長
8月 日本障害者リハビリテーション協会理事
11月 三笠宮妃殿下ご視察
54年
1月 RI職業委員会委員
1月 国際パラプレジア医学会副会長（～58年）
4月 職能開発センター完工
4月 第6回RIアジア汎太平洋地域総会（ソウル）出席
6月 国立職業リハビリテーションセンター運営委員
10月 日本パラプレジア医学会会長（～55年9月）
10月 第7回職業リハビリテーション研究会（太陽の家）
55年
1月 「脊損者の手引書」作成
5月 身障スポーツ創立20周年記念大分県身体障害者競技大会（大会副会長、技能部門太陽の家）
7月 ISMGF執行委員
7月 大分銀行太陽の家支店創業
56年
3月 コミュニティセンターオープン
4月 重度身体障害者更生援護施設ゆたか寮発足（定員50名）



▲スーパーマーケット「サンストア」開店（S.52）

▲ヘッドドルプのクラップワイク博士来訪



▲テルアビブのR.I.世界大会で太陽の家製作の電動車いすを紹介

▲施設内に銀行支店を誘致

▲第1作業棟を改築、ソニー、ホンダの作業場が出来る

▲情報産業に身障者の職域を拡大

▲患者は遠くオーストラリアから

中国に車いす66台贈る
用具や競技用
訪中の中村裕太陽の家理事長が計画
趙首相の要請受け

大きな発展誓って
大分合同「愛知太陽の家」オープン
太陽の家開所

大分合同新聞
初の大分国際車いすマラソン
力走 さわやか
沿道から大声援

県身障者競技大会
社会復帰へ燃えて
力強く1200人

6月	RIレジャーレクリエーションスポーツ委員会委員長
8月	国際パラプレジア医学会（イギリス）出席
8月	インドネシア、タイのリハビリテーション中堅指導者研修受け入れ
9月	ホンダ太陽株式会社取締役社長
9月	別館作業棟（オムロン、ソニー、ホンダ）創業
10月	ICTAベラジオ会議（イタリア）出席
10月	皇太子殿下ご懇談（杉の井ホテル）
10月	三笠宮寛仁殿下ご視察
10月	第1回国際身体障害者技能競技大会（アビリンピック、大会総務委員長）
10月	国際障害者年記念第17回全国身体障害者スポーツ大会（国際渉外部長）
11月	第1回大分国際車いすマラソン大会（大会副会長）
11月	フィリピン政府リハビリテーション職員研修受け入れ
57年3月	日本リハビリテーション医学会認定医
5月	大分県病院協会理事
7月	第31回ISMG（イギリス）日本選手団団長
8月	ILOセミナー（バンコク）出席
10月	第2回大分国際車いすマラソン大会（大会副会長）
10月	第3回フェスピック大会（香港）日本選手団団長
11月	フェスピック協会名誉会長
11月	財団法人国際身体障害者技能交流協会理事
58年3月	第7回RIアジア汎太平洋地域総会（クァラルンプール）出席
4月	日本整形外科学会認定医
7月	第36回全国レクリエーション大分大会別府市実行委員会顧問
11月	第3回大分国際車いすマラソン大会（大会副会長）
12月	三菱商事太陽株式会社代表取締役社長
59年4月	第8回RIアジア汎太平洋地域総会（ニュージーランド）出席
4月	RI代表使節団として北京訪問
4月	愛知太陽の家開所（定員　福祉工場100名、授産場50名）
4月	第1回国際障害者レジャーレクリエーションスポーツ大会（大会副会長）
5月	中国身障スポーツ視察団来訪、スポーツタイプ車いす66台寄贈
5月	RIライフパトロン就任
7月	大分県福祉技術開発調査専門委員会委員
7月	自宅で死去「慈慶院彰徳日裕居士」（23日）

1．主な発表論文

年・月	課　　題	雑誌名
32. 5	整形外科の回復訓練―九州大学整形外科教室の現状―(共)天児	手術　vol.11. no.5
36. 7	2例の難治なる先天股脱の装具による治療経験（共）安藤、久富、浜崎	整形外科 vol.12. no.8
36. 8	大分県地方における急性灰白髄炎の臨床的観察　第1編・疫学及び病像（共）高安、大内、垣迫、遠藤、矢ヶ崎、河野	臨床小児医学 vol.9. no.4
37. 2	Neuroblastoma sympathicumの1例について（共）安部、松本	整形外科 vol.13. no.2
38. 7	英国国立脊髄損傷センターにおけるRihabilitationの実際について　1	整形外科 vol.14. no.7
38. 8	〃　2	整形外科 vol.14. no.9
39.11	脊髄損傷者のオリンピック	日本医師会雑誌 vol.52. no.9
40. 4	国際身体障害者スポーツ大会を終えて	整形外科 vol.16. no.5
40.11	日本のリハビリテーションはいかにあるべきか	医療　vol.19. no.11
40.	脊髄膀胱についての研究（第1報）（共）山本、井上、井口、角田、浜崎	医療　vol.15. no.2
42. 8	脊髄損傷のリハビリテーション	医療　vol.21. no.8
43.10	身体障害者（主として下半身麻痺者）の労働能力についての研究（第1報）（共）畑田、山本、本多、直野	整形外科と災害外科 vol.18. no.1
44.10	重度身体障害者に対するエレクトロニクスの応用（共）畑田	リハビリテーション医学　vol.9. no.4
48.	Working Ability of the Pararlegics	Pararlegic vol.11. no.2
49.10	重度身障者のための生活ならびに作業環境に対する人間工学的改善	リハビリテーション医学　vol.11. no.4
50. 4	身障者とスポーツ（医師の立場から）	総合リハビリテーション　vol.3. no.4
53. 1	身障者スポーツについて	リハビリテーション医学　vol.15. no.1
56. 3	脊髄損傷のリハビリテーション	今日の治療方針 1982年版
57.11	スポーツ参加のための医師手引書	整形・災害科 vol.25. no.12

2．主な講演

51. 3	世界の特にFespic areaに於る身体障害者スポーツの未来について	インドネシアYPOC
52. 1	The Latest Legislation on the employment of the Disabled in Japan	the 4th R.I. Reg'l Meeting
54. 4	Integrating the Sheltered Workshop into the Community	the 6th R.I. Reg'l Meeting
56.10	役にたつ身体障害者雇用への道	アビリンピックセミナー
56.10	A new Factory for the Severely Disabled（共）井口、畑田、浅山、緒方	IMSP Scintific Meeting
	International Wheelchair Marathon（共）井口、畑田、浅山、緒方	〃
59.	Sports for the Disabed in the Far East	Rihabilitation World Spring-Summer '84

▲愛知太陽の家のオープン

▲公認大分国際車椅子マラソン大会
ジョン・スクルートン女史とともにスタート前の選手を激励

▲中国に車いす66台を贈呈

中村語録

我が国においては脊髄損傷患者の在院期間はほとんど数年以上にわたり、就職率はゼロに近い。脊髄損傷患者の近代的なリハビリテーションは、患者が早く退院して社会復帰し、有給就職してこそ終るものである事を強調したい。著者らは脊髄損傷患者も含め重度の身体障害者の働く工場を設立して微々たる努力を続けているが十分ではない。

（65年　現代外科学大系第44巻A運動器1）

身体障害者の社会復帰―就職を望むならば、労働医学的根拠に立脚して充分な医学管理・労務管理・機械の改造・開発や行政官の理解が必要である。身障者の真の幸福は単なる慈善や同情ではなく、彼らに働く機会を与える事である。今後とも雇っても損をしない身障者を養成するために、この研究を続け報告するつもりである。

（68年10月　西日本整形・災害外科学会機関誌　第18巻第1号）

Sexnal Rehabilitation　は非常に重要である。医学的研究ももちろん必要であるが、それに増して大切な事は、食べられるだけの給料と夫婦で住めるアパートを与える努力がなされねばならぬ。

太陽の家では今まで四十組結婚したが、太陽の家が苦しい時から立ち上がり、十分な給料とアパートを与えてから急速に結婚数が増えている。

（72年10月　日本パラプレジア医学会総会）

頸髄損傷者の職業リハビリテーションはまことに困難ではあるが、全く不可能ではない。医師やパラメディカルの人々が頸髄損傷者のゴールを始めから『雇用』にかかげ、患者の Motivation を促進すべきである。二次産業・三次産業の中に必ず適職がある。行政や雇用主などを医師自らが開拓してやる程の熱意がいる。工作機械・補助具・自動化・ロボット化など人間工学的研究にも医師は指導的立場をとり、積極的に工学関係者と話し合わねばならない。

（79年9月　第11回医師卒後研修会講義）

身障スポーツはあくまでもリハビリテーションの一環として行われるべきものであり、ひとつのサイエンスである。また、身障スポーツは他の機能訓練と異なり、自主的に本人の意志に基づいて行うものであり、身障者の健康の保持・増進と積極性・社会性を持たせる上で優れている。

また、健常者は一般的に身障者の労働力を過小評価するきらいがあるが、彼らの能力を再認識させるにもよい機会である。

（75年　総合リハビリテーション第3巻第4号）

従来のパラリンピックは先進国中心のお金のある人だけが参加できるような仕組になっていまして、しかも車イスだけのスポーツという傾向が強かった。そこで発展途上国からも、そして車イスに乗れない人や、目の不自由な人もすべての障害者がやってきて競技をやろうというのが大会の趣旨だったのです。競技上の成績はまったく度外視して、スポーツに参加する事がフェスピックのポイントなのです。

（75年7月　明日に向かって語ろう　西日本新聞）

「若い力」の演奏と共に大会旗がメインポールにひるがえる。いまはじめて、東南アジアの発展途上国の身障者がスポーツの場に集まった。脊髄損傷者だけの車イスの大会から、身障者全体の国際大会がいま始まった。私の感動は、出場者・関係者全員の感動だったに違いない。そしてスタンドを埋めた観衆の一人一人の胸に同じ感動が打ち寄せたに違いない。日の丸の掲揚も、君が代の演奏も、マスゲームもない会場に、朝早くからつめかけた人々は、燃えるような太陽の下で席を移動する事もなく、連帯の大きなうねりの中にあった。

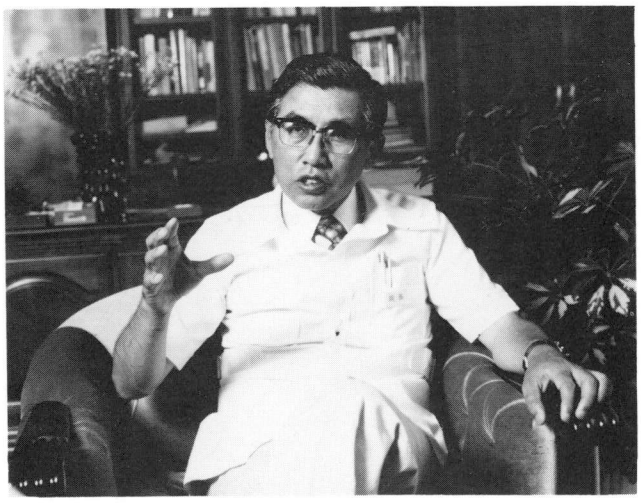
（75年11月　太陽の仲間たちよ）

私はフェスピックのやり方としては、どんな国でも、ヤシの木の下やヤシの浜辺でも、ヤシの実をすすりながらでもできるような、身障者のための大会にしてほしいと、どんなに貧しい国でもホストカントリーになれるような大会にして欲しいという事がはじめからの願いで、それであまり派手にやらず、大きくやらずという事で大分のような田舎でやった訳です。

（76年8月　四国太陽の家設立準備委員会にて講演）

障害者は、健常者以上にレジャー・レクリエーション・スポーツ活動を必要としている。たしかに近年記録中心の障害者のスポーツ大会は世界各地で展開されているが、重度障害者や精神薄弱者等、競争的スポーツに参加できない多くの人がとり残されている事を忘れてはならない。

（84年　第1回国際障害者レジャー・レクレーション・スポーツ大会報告書）



私は社会福祉のベースは単なる観念的・慈善的・宗教的なものではなく、あくまでも科学であると信じている。

（71年1月　生命の科学　第37回月報）

身障者に作業能力がないのではなく、雇用者の方に身障者を受け入れる対策が何らないというほうが当てはまると思う。たとえばトイレひとつとっても言えます。車イスで行けるのがありますか、また、車イスで二階に上がれるようなスロープ式になったところがどれほどありますか。官庁みたいにいかめしい所ほどないですね。作業能力は充分ありますよ。

（72年11月　西日本新聞）

たとえ身障者といえども、その能力は磨けば無限である。単に手がない、足がないといった医学的・物理的条件だけで等級をつけ、それでその身障者の機能まで決めつけるのはよくない。大事な事は、自他共に今までの身障者手帳の等級を白紙にもどして、いかにして身障者に Motivation（やる気）を起こさせるか、また雇用側も工夫して受け入れるよう努力するかである。

完全な評価法などはない事を銘記しなければならない。

（73年9月　職業訓練9月号）

日本では『身障者収容授産施設』であって、一般の社会・家庭からの通勤は少ない。太陽の家もほとんどが太陽の家の宿舎にいます。なぜ身障者は一般社会から通勤できないのかと溜息がでるのです。大施設に身障者をつめこむ施設第一主義の時代はもう終りにしたいものです。身障者の自立のための技術を深め、就労を促進し、保護より機会を与えるべく方策をたてねばなりません。

そのためにも我が国の古典的授産種目を、自立して食べてゆけるような近代的な授産に切り換えねばなりませんし、重度身障者の保護収容にも人権尊重の精神を忘れてはならないと思うのです。

（74年11月　第2回障害者職業リハビリ研究会記念講演）

働く事がいかに良い治療であり、また治療だけでなく、本人のためにいかに幸せな事か。とにかく年金や無料給付をすればいいんだというのではなく、なんとか働く機会を与えてやってゆくという事が大事である。一番幸せだ。十年を通じて得た信念である。

（75年9月　NHK土曜レポート）

あらゆる努力をしたのちで評価する。努力しないで障害が重度であるとか、人間の能力とかを決めつけてはいけない。評価は施設の能力しだいで上がり下がりする。努力する施設は能力を高める事ができる。太陽の家では "No Charity but a Chance !" （保護より機会を）といっている。

（76年10月　第13回九州地区肢体不自由教育研究大会講演）

私はチャリティーに期待せず、借金して土地を買い、一般社会のルールに従い、他の会社と競争する事を信念とした。車イスや松葉杖を少しでも意識したならば、敗退の兆しが見えてきたと言わざるを得ない。そこにはチャリティーや同情は少しもない。力対力である。

（77年1月　RIアジア汎太平洋地域委員会）

人気とりに障害者の専門体育館や施設をつくる事は、隔離する結果になり、障害者のためには役立たない。施設や障害年金を支給するのではなくみんなと暮らせる、働ける場所が必要なのです。

それより一般の体育館にひとつのスロープ、ひとつの障害者用トイレを設け、みんなと融合してスポーツを楽しみ、暮らせる方式を取り入れるべきです。アパートをつくる時も、一階の一つか二つに障害者住宅を併設すべきだ。専用施設の万能主義は社会復帰を断ち、ありていに言えば刑務所をつくっているようなものです。為政者の人気とり施設は、すぐ枯れる生け花のようなもので、しょせん根なし草です。

（75年6月　読売新聞）

たとえば、日本人に多いメガネを外したとしますと、その人は相当のハンディを負う。だからと言ってこれを身体障害者として一般社会から隔離しようとしたら猛反対が起こるでしょう。そんな極端な議論があるものかという人がいるかもしれませんが、日本でやられている身体障害者福祉政策は、それと本質的にはかわりないのです。

（75年7月　西日本新聞）

長年ずっと社会に生活していて、いきなりある時点でもう年寄りになった、障害者になったからといって、急に社会から離れ、どんなに冷暖房が整った所にいても、けっして幸福ではないという事を、私は太陽の家の運営をしていてよくわかります。

施設にいる事は、決して幸福な事ではないとよく知っていて下さい。そういう意味で今後はだんだんと脱施設といいますか、いわゆる日本の施設万能主義は終らねばならないと思います。

（79年7月　これからの福祉と教育　大分県小中学校校長会講演）

これからの教育は、人間らしい人間を育てるようになる必要があります。その意味で福祉施設はただ身障者の世話をするというだけでなく、今後、教育の場として人間的な情緒豊かな人を育てあげる場としての使い道があるのではないでしょうか。

（82年　教育と福祉　別府市教育委員会主催　第4回文化講演会）

僕は、坂を登るのを手伝う時は、車イスの人に荷物を持ってもらう。そのほうが楽だからね。登りきったら自分で持つ。持ちつ持たれつの関係がいいんです。チャリティーの対象としてだけ身障者を見るのは間違いなんです。

（84年4月　U（ゆう）Free Paper for University Student Vol 4 no.4）

昭和三九年（一九六四）東京オリンピック後開催されたパラリンピックに参加した日本選手団のうち五〇名の車イス選手全員が病院の患者であり、ゲーム終了後五〇名ともまたもとの病院に帰って行った。この悲しい記憶が身体障害者の働く工場〝太陽の家〟を創始する直接の動機となった。

（73年9月　職業訓練）

追いかけるように水上さんから手紙が来た。

「――名称は〝太陽の家〟としたい。」

すばらしい名前をつけてもらって〝太陽の家〟はすでに現実にあるかのように私には思えた。

生命の源ともいうべき太陽の明るさと強さこそ身障者に必要なものである。またその〝家〟である事は、わが家にさえ身を置く場所を持たない多くの障害者にとって最も必要な条件であるにちがいない。もちろん〝家〟と名乗るからといって、過保護を目指すものではない。強い意志と適応力を身につけて社会へ飛び出すための〝家〟である。

（75年11月　太陽の仲間たちよ）

「先生！食器が、トイレの紙がありません。」と伏し目がちに訴える初代牟田事務長の顔も、連日徹夜の開所事務で白くむくんでいた。私はあちこちから盗むようにして不足品を集めた。国立別府病院は昔は海軍病院であったが、倉庫には使えない錨の印の入った食器がたくさんあった。帝国海軍払い下げの欠けた白い皿で食事をしていた皆の顔が忘れられない。

（75年10月　10周年記念寄稿　太陽新聞第18号）

着実に売り上げが伸び、いささか自信を得た私は、熟練した身障者を一般社会に就職させようと努力し、昭和四一年～四二年（一九六六～六七）の二年間に関係者の努力により四六名が就職していった。しかし、結果は惨敗であった。あれだけ太陽の家の中では優秀であった車イス労働者も、就職に当たって慎重に打ち合わせたにもかかわらず、褥創をつくって帰ってきた。

私はその痛手から立ち直るために、身障者の社会復帰よりも太陽の家自身の授産場を高賃金の工場とし、従来の手仕事をやめ、コンベア方式の近代産業を誘致することを決意した。

（75年　太陽の家10年の歩み）

We could prove that the paraplegics were excellent workers. Spinal workers are not at all inferior to the able-bodied.
We doctors, should give our help and knowledge to them not only at the bedside but all so in restoring their working capability.

(PARAPLEGIA Vol.11 No2 Aug. 1973)

我々は脊損者が優れた労働者であることを証明した。脊損労働者はけっして健常者に劣っていない。我々医師は彼らを治療するだけでなく、彼らが労働能力を獲得するためにも、知識を提供したり援助を行うべきである。

（パラプレジア　第11巻　第2号　1973年8月）

There is no perfect method to evaluate the ability of the disabled. Their lavour ability is infinite. It is important to give them the chance to work.

(R.I. Regional Committee for East Asia and Pacific 4th Annual Meeting in Bankok Jan. 20 1977)

障害者の能力を評価するための完全な方法などは存在しない。働く能力は無限である。彼らに働くチャンスを与えることこそ重要である。

（R.I. アジア汎太平洋地域委員会　第4回定例会議　1977年1月20日）

太陽の家は授産場から出発している。しかし、その目標は身障者が力をあわせ、一般の工場と全く同様に運営し、自らの手で社会的に自立する事なのである。それはもはや授産場ではない。立派な生産会社であり、身障者の社会復帰・社会への参加の場である。

太陽の家は身障者の労働と日常生活のすべてが行われる総合環境である。したがってここには身障者について検討されなければならない、およそあらゆる種類の問題が集約されて存在する。

（69年6月　工芸ニュース　第36巻6月号）

一般には身障者に残業は過酷のように見えるが、当方では社会復帰を目指すためにはある程度の残業にも耐え得る体力や精神力をつける意味もあり、残業を完全に締め出してはいない。その他労働条件も、施設内にある身障者機能開発センターで科学的に研究したうえで決めており、そう無理な作業はさせていない。現実には商業ベースに乗らねばならないし、入所者の働く意欲を盛り立てるためにも能率給はやむを得ない。ただ、こうした事でいたずらに身障者に同情するより、前向きに理解して欲しい。残業の問題はだれよりも私が一番心配している。

（72年2月　身障者の残業酷では　大分合同新聞）

授産場とはいえ、一般企業と変わりのない福祉工場とほとんど同じ性格だ。それだけに福祉面と企業面との兼ね合いがむずかしい。身障者の労力だけで十分経営が成り立つ業種は少なく、やむなく健康な人を雇ってでもやっていかなければならぬのが実情だ。

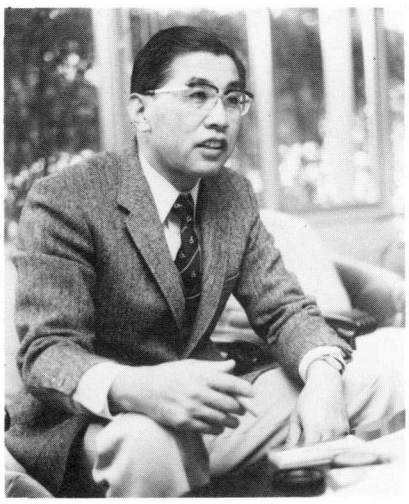
（72年5月　生産第一主義という批判に対して　大分合同新聞）

はじめは身障者だけでやっているのだという事が誇りであったが、最近は身障者と健常者がまじった社会を作るべきだ、そして最後には太陽の家なんかなくなってしまえという事を目標にしています。

（76年10月　第13回九州地区肢体不自由教育研究大会講演）

障害等級で表わされる重度の障害者と、作業面から見た障害者の能力は必ずしも一致しません。作業をするうえで障害者のどこか動かせるところがあれば、その機能する部分を最大限に生かして仕事が出来るようにする事が大切です。そのような理念に立って、太陽の家では機械の改造を行ったり、簡単な治工具を使うようにして能率よく仕事が出来るようにしてあります。

（83年　日本医療法人協会報　No.73）



家族を連れて弁当持ちでドライブに行くのは楽しいものです。また私は整形外科医ですので、大きな手術があった後は必ず車に乗ります。酒も飲めませんので手術後に日出町あたりまで真夜中でも行ってくる。そうすると気分が爽快になる。冬は自動車の中で本を読みます。

（63年9月　私たちはオーナードライバー　大分合同新聞社）

最近欧米ではリハビリテーションというものがさかんなようだから、その研究をしてみないかと言われたのが昭和二九年（一九五四）頃だったですね。図書館に行っても本はほとんどなかったですが、英語もあまりできないのに毎日〳〵英語やドイツ語の本ばかり読んでみて、半年くらいしてやっとリハビリテーションとはこういうものだという事がおぼろげながらわかったですね。

じつは、初めに辞書をパッと引いた時、刑務所の受刑者の更生という説明があって、びっくりしちゃったのです。なんで教授はこんな事を僕に言ったのかなと思ったのを憶えています。

私の国立病院時代からずーっと一緒で、今も中村病院の副院長をやってもらっている畑田和男先生が非常にいい女房役だったですね。ほとんど二人でやったようなものです。だいぶ肝蔵なんかが悪くなって倒れかかったけれども、なんとか頑張って、太陽の家をつくってからなら死んでもいいと思ってあまり治療もしませんでしたが、おかげさまでいつの間にか良くなりましたね。

結局、身障者に救急医療から仕事を与えるまでという事が信念でございましたから、スポーツ活動もやったし、色々やって、一応自分が思った半分位の事は出来たような気がします。リハビリテーションというのは、非常に難かしいように思いましたけれども、身障者を社会人として扱い、適当な仕事を与え、アパートを造ってあげる、つまり住む所と仕事を与えれば自然に色々なものができると思います。

（81年3月　リハビリテーションの道ひとすじに　整形災害外科第24巻第3号）

各地に太陽の家の姉妹関係の施設が実現し、果ては東南アジアの方まで広がったら、私の夢は終わるでしょう。

（72年7月　太陽新聞創刊号）

語る

中村裕先生の思い出

水上　勉

娘が二つの頃だった。家内の腰骨の一部を切り取って、娘の腰に移植し、生まれつき歩行しがたかった両肢をうけてとめさせ、歩けるようにして下さった。大手術であった。先生はまだ国立病院の外科におられた。扇山の整肢園長も兼ねておられたと記憶する。暢気な父親は、母子を先生にあずけたきりで、東京で原稿に追いまくられていたが、時々別府を訪れては先生の傾蓋に接した。「外国には障害者の自立工場がいくつもあるのに、日本にはありません。病院から座敷牢へ、これでは障害者の問題は永遠に片づきません。福祉対象から自立擁護へ、そういう施設を計画しています」すでに畑田和男先生が助手だったと思う。おふたりが青写真を見せて、熱っぽく語られた夢は、日本で最初の重度障害者自立工場建設にあった。何とかリハビリ……という片仮名の仮称だったと思う。病院よこに空地があり、小野田セメントの療養所が売りに出ていた。何とかしてあれを買いとって、根拠地にしたいが、お金がいる。という話である。私は当時、婦人公論に「くるま椅子の唄」を連載中で、先生をモデルにしていた。その原稿料を集めて百万円だったか、と思う。先生は先生で、自宅を抵当に入れて工面し、合わせた金三百万円が小野田セメントへの手附金だったと記憶する。「太陽の家」という名はどうですか、英語では一般にわかりにくいでしょう、と言ったら、畑田さんもそれがいい、と賛成されて、草の生えていたセメント会社の療養所の入口に棒杭が建てられた。「太陽の家の全社員は障害者である」「健常者は出資者である」有名なスローガンは先生の口からいくつも飛び出し、入口に額に入れて飾られた。今でも思い出す。開所式というのか開業式というのかわからなかったが、小雨の降る空地にテントを張り、県立ろうあ学校生徒が楽隊をかなでて、私たち来賓（出資者）を迎えた。すべて中村方式による演出だった。雨はひどくなり、どしゃぶりになった。五十人位の来賓だったろうか。

お絞りおきの竹細工、旅館のシーツ・カバーの洗濯、それが「太陽の家」の業務だった。別府は竹細工の名匠がいた。並松という細工師が、障害者を指導しての工房だった。五、六人の車椅子青年がノコギリ屑にまみれていた。先生は東京へ来ては安宿に泊って資金ぐりに廻っておられた。大阪の早川電機からヤグラコタツの注文を受けて工房が増えた。だが、ノコギリ屑が舞う中での作業はつらく、障害者社員は、手拭いで口をしばってマスクにした。集塵機が買えなかったのである。厚生省、自転車協会、寄付金のくれそうな所を、くまなく先生と連れだって廻った。渋谷に「東京事務所」を勝手に開いて、私は在京理事として金集めの根拠地にしたりした。あのつらかった創立時代の、先生の東奔西走ぶりを、今ふり返ると、外科医をやりながらの片手間仕事にしては、何かに取り憑かれた人のように思えた。左様、先生は片手間ではなかった。別府で医者をしながら、もう一人の企業者として「太陽の家」の拡充に猛進しておられたのである。

高安慎一初代理事長、水上勉理事と

それから二十年の才月が流れた。今日ご覧のような「太陽の家」になった。私は何ほどのお力にもなれない、一人の障害児の親にすぎなかったが、先生の行動力にひっぱられて官庁廻りにあけくれた、創立時代の日々を今思い返しているのである。

「中村裕伝」と名付けられる先生の人物と行蹟を語る本があれば、おそらく、この当時の辛苦の才月が、いくたの資料によってくまなく語られるだろう。そういう本が編まれる日を待つしかない。中村裕という医師は、日本ではじめて、病院から座敷牢へと言われた重度障害者の人生に、明るい自立の風穴をあけた先駆者である。そうして事業の成功者でもあった。大勢の人が手助けもした。先生の障害者への深い愛が、人々をひきづったのである。行数がないのでこれしか云えぬが、自分の事は何ほども語られなかった先生だけに「伝」にはお手伝いしたい思いがしきりにつのる毎日である。

中村裕君を偲びて

九州大学名誉教授　天児　民和

七月二十三日別府太陽の家の理事長中村裕君が他界した。五十七歳である。彼の短い一生の間に身体障害者の福祉に大きな功績を遺している。彼は昭和二年三月三十一日別府市に生まれた。父は有能な泌尿器科専門医で今日も尚御元気である。中村裕君は少年時代より器械いじりが好きで、やがてオートバイ・自動車に興味が移って行った。九州大学医学部専門部を特待生で卒業、インターンは東京で修了して昭和二十七年九州大学整形外科に入った。器機好きで筋電図研究グループに入り、手指運動の研究で学位を昭和三十二年に授与せられている。

一方、リハビリテーションの近代化の計画に参加し、Hubbard tank を設置したが、当時市販せられていなかったので、近所の鉄工場で中村君が指導して製作した。このタンクは現在も九大病院で使用している。昭和三十二年日本手の外科学会が発足し、米国より Joseph H. Boyes が度々日本に来たが、中村君は手指運動の筋電図学的研

究をしていたので、Boyes に認められて、Los Angeles で手の外科を研修したこともあったが、中村君はスケールの大きな仕事でないと満足できないので、帰国後九州労災病院で内藤三郎院長の下でリハビリテーションの勉強を開始した。

九州労災病院は日本最初の労災病院で、内藤院長は Canada の Toronto にある労災病院のリハビリテーションの設備を手本として整備していた時であった。内藤院長はリハビリテーションの重要性を中央官庁に理解してもらうのに苦労していた。その資料となるリハビリテーションの教科書もないので、教科書の出版を私に求められた。そこで中村裕君と原武郎君と協力して編集に当たり、原・中村両君は訓練のモデルとなりその写真を多くこの書物に採用した。原君は松葉杖歩行、中村君は車椅子訓練のモデルである。そして昭和三十四年に「リハビリテーション、医学的更生指導と理学的療法」と題して南江堂より出版したが、中村・天児の共著とした。この中に中村君の多く写真を見ることが出来る事は感慨深いものがある。

その後中村君は別府国立病院に移ったが、内藤労災病院院長の教示により英国の Stoke Mandeville の脊損センターに留学した。この病院は第二次世界大戦で英軍は Normandy に上陸を計画したが、当然多数の戦傷者の発生を覚悟し、その医療を最高のものとしたいと考え、Stoke Mandeville に脊損専門病院を建設し、ドイツよりユダヤ人排撃を逃れて Oxford 大学に来ていた Ludwig Guttmann が院長となったが、効果の少ない手術を避け、残存機能をスポーツを利用した訓練で効果を挙げていた。この訓練をば Stoke Mandeville Game と称し、国際的に推進し昭和三十五年 Rome のオリンピックの後に車椅子利用者のスポーツ大会を開催し、これを International Paralympic とした。ちょうど中村君が Guttmann のところに留学したのはこの頃であった。次のオリンピックは東京と決定していたので、東京でもこの Paralympic を開催すべきと言う Guttmanの意見により、中村君は帰国後厚生省と交渉、昭和三十九年東京オリンピックの後で代々木で第二回の International Paralympic を開催し、重度身体障害者も訓練により社会的活動に参加し得ることを明示した。

その後中村君は国際的な活動を開始している。国内では重度身体障害者の生産者として社会生活に参加し得る工場を開設し、これを太陽の家と命名、社会福祉法人として発足、昭和四十三年理事長となっている。この工場は内外の注視下に成長し、日本の一流の企業である、ソニー・オムロン・ホンダ及び三菱が参加し、外国よりの参観者も多くなった。また International Medical Society of Paraplegia の副会長を四年間勤めている。なお内外の多くの賞を受け、例えば、高木賞・吉川英治賞、大分・西日本・毎日・朝日の各新聞社より賞を受けている。また、死後勲三等を受けている。

酒を飲まぬ彼が肝硬変で死亡し、運命の不思議さに私は当惑したが、彼の棺に彼の功績を書いた私の論文別刷を入れて最後のお別れをした。

（リハビリテーション医学　Vol.21 No.5　一九八四年九月）

「まさに人生をかけ足で走り抜けたような人だった」

立石電機株式会社会長　立石　一真

私が中村裕先生の訃報に接したのは、たまたま京都府知事をオムロン太陽電機に案内することにしていた七月二十三日の、その朝のことであった。

とりあえずオムロン太陽に電話を入れたところ、吉松工場長からは、すでに受入れ体制はできているので、予定どおり来てくれとのことであったので、その指示に従い、オムロン太陽を詳細に視察してもらい、わたしは翌日の密葬に参列することにした。その密葬の席で、隣りに座っていた作家の水上勉氏が「まさに、人生をかけ足で走り抜けたような人でしたね」とつぶやいたことばが印象的であった。そしてその間に、あれだけの未開の仕事をやり遂げて、五十七歳の若さで不帰の客となった先生を称え、かつ惜しまずにはいられなかった。

中村先生とわたしの出会いは、昭和四十六年九月十九日、橋本登美三郎先生の紹介で、秋山ちえ子さんと二人で御室の本社に来訪のときであった。そのとき先生は、福祉工場の建設計画を熱っぽく語って、その工場に入居し、五十五人の重度身障者をつかって近代産業方式を植えつけてくれと懇願した。

ずいぶん突然の事ではあったが、わたしはこの仕事はわが社の社憲にも添う事なので、その事業に協力することにした。そしてオムロン太陽電機を設立、昭和四十七年四月八日に開業した。その成功がきっかけとなって、昭和五十六年のソニー・太陽、ホンダ太陽の創業、さらには今春には蒲郡太陽の家の開設、デンソー太陽の稼動へと発展するまでに至った。

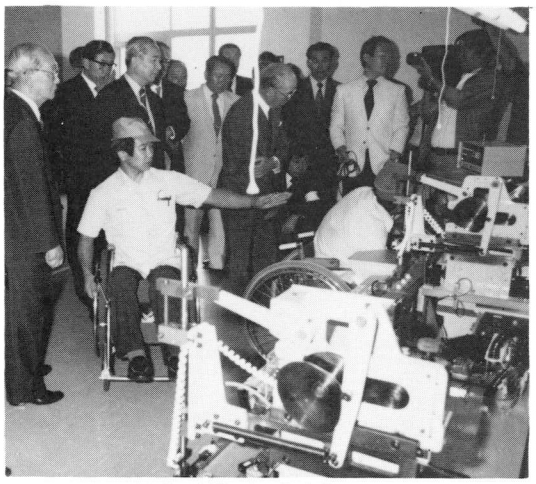
「世に心身障害者はあっても、仕事に障害はありえない。太陽の家に働く者は被護者ではなく労働者であり、後援者は投資者である」との中村先生の理想実現の最初のきっかけは、当時のわたしの大英断にあると、中村先生は常々語っていたそうである。先生はその感謝のメモリーのためとして、オムロン太陽の第二工場にわたしの胸像をた

全国のトップを切って福祉工場を設置（S.47）

て、去る六月二十八日にわたしと女子社員の手で除幕式が行われた。その除幕式での先生の挨拶のなかに、同様の大英断との言葉があったので、わたしは「昭和三十年に日本で初めてのオートメーションの商売を始めて以来、ずっと新しいことに対する挑戦の連続で、オムロン太陽もその多くの挑戦のひとつにすぎない。大英断などと感謝されると面はゆいばかりである」と答辞を述べたばかりであった。

太陽の家の幹部の話では、若い頃手術中に感染した血清肝炎が一応、治ったかに見えたのが最近、頭をもたげて徐々に悪化し、この二月ころには相当弱っておられたとのこと。それでも先生は今春開設した蒲郡太陽の家につづいて、京都の福祉工場建設プランをまとめ、この春にはご夫妻でご入洛、その説明をうけたところであった。

思えば、最初の出会いからわずか十三年足らずこの間、私心を忘れ、ひたすら心身障害者の治療と自立というひとすじの道に、自らの人生と情熱を完全燃焼された、まさに水上勉さんのことばのように、人生をかけ足で走り抜けたこの偉人を称えるとともに、哀惜の念を禁じえない切なるものがある。心からご冥福を祈るのみである。　合掌



近代的な太陽の家の作業場

「中村先生と歩き…そして歩く」

ソニー株式会社名誉会長　井深　大

七月二十三日、早朝私はソニーの理科教育振興資金の審査会が開かれる山中湖畔のホテルへ急いでいた。車の電話が突然うとうとしていた私の眠りを覚ました。

会社からの電話で別府の中村先生が重体であることを告げられた。いやな病気であることを知っていたので愕然としてぶるぶると身体が震えたことを覚えている。

思わず回復されることを心から祈った。しかし間もなく次の電話で先生の死が告げられた。

今年はどういうわけか身内や友人の死亡が相ついでいたが、正直いって先生の死ほど私の心をえぐったものはなかった。悲しいというよりは途方に暮れて呆然としてしまったという方が当っているかも知れない。

廻り燈籠のように二十年近い先生との交遊が頭に浮んできた。

太陽の家が生れる前であった。誰の紹介でだったか忘れてしまったが、ある時ソニーの応接間に元気な人間があらわれた。自分は大分で整形外科医を営んでいる者だが、外科手術をした身体障害者に仕事をしながらリハビリを行う収容施設をこしらえようと思う。自分は慈善を求めに来たのではない。ソニーは、沢山の下請企業を使っていると思うので、その仕事の一部を出してもらいたいという要請だった。ただ、それが当然のことであるかの如く、たて続けにしゃべりまくり、そうして試みに出来た竹細工か何かを見せられたのである。随分厚かましい人もあったものだと私はびっくりしてしまった。

どんな人かも、どんな技術がある人かも全く分らない時に、ひっかかったのは東京から遥かに遠い別府まで何の因縁で仕事を出さなければならない義理があるのかと先づがつんときたのが先生との初対面の卒直な印象であった。

間もなく、太陽の家がスタートし特異な存在として新聞にも時々書かれるようになった。作家の水上さんの名前も出るようになり、私はああ、あれがそうだったのかと思うようになったが、未だ他人事でしかなかった。

皇太子殿下、妃殿下のご来所などで、急速に有名になって来た太陽の家には、やや関心を持ち始めながらも未だ訪ねたこともなかった。その頃、秋山ちえ子さんと一緒に中村先生が再びあらわれた。又「仕事を出せ」のむし返しである。秋山先生とは厚木工場の女子従業員の指導等をお願いしてよく存じ上げているので、この前とは心構えが少し違っていた。

仕事の性質上ソニーからは少し無理だと正直に言って、早川電機等は、といったらもう交渉が始っているとのことであった。

それでは京都の立石電機なら話にのるかも知れないといったら、御両人はこれから直ぐ京都へ出かけるとのこと、こちらがびっくりしてしまった。あわてて立石さんへお電話をしたことを先日秋山先生から指摘されて思い出した。太陽の家の大きな礎を築いた立石さんとの関係は、私の責任逃れの発言から始ったとは感慨無量のものがある。

それ以来何時とはなしに秋山さんに押され、中村先生に強引にひっぱられて太陽の家へのめり込んでしまうはめになってしまった。

といっても私はほんとうに名前だけで、何のお役にもたっていないことを今も申し訳なく思っているが、私には言い訳があった。何時も何時も中村先生がすっかり一から十までやってしまって、私はただ賛成賛成といっていればそれで事が足りていたからである。

太陽の家を訪れる度に、先生の夢が片っぱしから如何に早く成長し、完成して行くかに目を見張ってしまうのであった。私は日本のために、世界のために太陽の家を自慢していればそれでよかった。

随分乱暴だと思われる計画も先生にかかってはなんでもなく実行されていく。これは先生の強い使命観に、誰もがお役所の頑迷さといえども、しゃ

っぽを脱がざるを得なかったからなのだろう。
どんなことにも一家言があり、その趣味の広さには何時も頭を下げっぱなしだった。知れば知る程その人間的魅力に引かれていった。
先生の福祉論は一般に日本で考えられている福祉とは大分違っていた。
障害者を過度に保護することは決して福祉ではなく、自分で働く気になって自立する方法を考え、その場をつくることがなによりも大切であるというのが先生の考えである。障害者に ほんとうの生き甲斐を与え、その人生観に大きな変化をもたらしたのが先生の大きな功績である。
私は時々、先生の感化で障害者の方が、常人よりほんとうの幸福の意味を知っているのではないかとさえ思うことがある。
今年は蒲郡に太陽の家の弟分が生れ、今又京都にも出来ようとしている。しかし中村イデオロギーが真に日本で必要となるのはまだまだこれからである。
中村先生の残されたこの大きな遺産をどう守りどう広げてゆくかは、太陽の家に関係する私達の責任である。先生のような万能選手を求めることはむずかしい事だが、皆がその持っている知恵と力を出し合って、中村イズムを守り頑張ることが、せめて私どもに課せられた仕事ではないかと強く感じている。

「ビックリと感激と……」

本田技研工業株式会社最高顧問　本田宗一郎

或る日の中村医院の一室、患者と中村先生の会話……
先生―「なんだ死んだと思っていたら、まだ生きていたのか！」
患者―「バカ野郎、死んでたまるか！」
これが私が見聞きした初めての体験である。
おどろいた。なんてすごい事を云う先生だ、今に取っ組み合いのケンカが始まる雰囲気だった。

三笠宮寛仁殿下のご視察

しかし、良く考えてみれば、気の毒がったような慰めの言葉に比べ、なんと患者の気持をうまくとらえた、そして医師としての責任の強さを感じた会話だったろう。
私がヘリコプターを使って、熊本、大分方面へ出張した折、天候が悪く約束の時間に遅れてしまったが先生は、途中で取りやめの場合や不時着した時の対応など相手を気づかった配慮をされていたことを後で知り、恐縮したこともあった。
身障者事業についても、今でこそ、成功の実例として色々ニュースになっているが、ここまでに育ててきた苦労や意志の強さが、人間中村裕を支えていたからに他ならない。
現在、国家行政の建て直しである行政改革の仕事を井深大氏、秋山ちえ子氏等とやっているが、今でも強く印象に残っていることがある。
「太陽の家」の事業が軌道にのり、わずかながら利益の見通しもたった時、先生はしみじみ言った。「我々も税金を納める立場になったことを社員全員で涙を流して喜んだ」と。
この大切な税金を無駄に使ってはならない、と益々行革運動に力を入れている今日である。

「暖かさの中にキビシサが……」

株式会社田島製作所会長　田島　宏一

昭和四十四年の秋であったか、中村先生から太陽の家への巻尺工場の誘致について、当時の早川電機の社長の早川徳次先輩を通してご依頼があった。
東京と別府という地理的な問題の他色々事情はあったが、一言で云って中村先生の熱意に打たれたと云うべきであろう。早速お引き受けすることとなり、現在までの田島金工科としての太陽の家への協力ということになったのである。
私も昭和三十一年頃から身障者雇用に取り組んでいたが、これは早川先輩に教えられるところも多く、そこに更に中村先生という立派な同志を得たこととなり、私の念願を更に拡大するチャンスが得られたわけである。
私は第二次大戦以後、何か仕事以外に社会と結びつく方法はないものかと考え、満洲からの引揚げの母子家庭のお母さん方への職場提供、沢田みき先生のエリザベスサンダースホームからの孤児の引き取り、その後身障者雇用と進んできた。
私としては健常者と待遇地位など一切差別をつけないことを一貫した方針として来たが、この点についても基本的に中村先生と意見が一致したわけである。
太陽の家は重度障害者が多く、社会復帰への前段階としての問題を多く抱えているわけであって、職場へ容易に参加できる人達に対するよりも、広く深い配慮を必要としていることも良く理解できたが、太陽の家で中村先生を頂点として、全員がこの難かしい問題の解決に向って一丸となって燃えている姿に、深い感銘と一体感を得られた事は、私にとって大変幸せなことであった。
或る時、先生の別荘に家内と一緒に呼んでいただき、奥様ともご一緒に、いろいろとお話を伺う機会があったが、ご一家でアメリカへ旅行し、西海岸地方をドライブした時、泊るのはいつもモー

テルで、ベッドの数が足りず、ジャンケンで負けたものは床に寝たという、ほほえましい話を伺った。ご家族が親も子も同列一体となり、暖かさの中にあるキビシサが感じられた。

子供達が小学生の当時、よくテントを車に積んで家族でオートキャンプを楽しんだ私には、この点についても全く同感するものがあった。恐らく先生の身障者諸君への接し方にも、ご家族に対するのと同じように、暖かさの中にキビシサがあったことと思う。これこそ真の愛であろう。

昨年の春、ご挨拶に伺った時に、病院の先生の部屋でゆっくりお話する機会があったが、これが先生との最後のお話し合いになってしまった。

その時先生は、「仕事が広がりすぎて、いささか疲れた。後は畑田先生に頼んで少し休養しようかと思う」ともらされた。私も現役で体を傷め、今は若い者にまかせている話などを混じえて、先生のお考えに心から賛成し、おすすめもしたが、先生のご気性から云って、或るいは環境が先生の休養を許さなかったのかとも思われる。

いづれにしても先生が同志の方々となされた先駆者としての立派な仕事に、まさに身を殉じられたということである。

人間への愛に貫かれた先生の一生は、本当に見事なものであったと思う。

「頭脳労働の分野を切り開く」

三菱商事株式会社副社長　馬渕　秀夫

中村先生と三菱商事㈱の出合いは、昭和五十三年頃からで、「コンピュータを活用して、身体障害者の社会復帰の道に新たに頭脳労働の分野を切り開く」をテーマに、太陽の家と三菱商事㈱が共同で職域開発に取り組んでいました。私がこの事業の責任者に就任したのを機会に別府の「太陽の家」を訪問したのは昭和五十七年七月でした。

この時中村先生にお目にかかり、夕食を共にしながら親しくお話しさせて頂いたのが最初で、先生からマラソンやバスケットなど身体障害者スポーツのお話やら、七人の身障者から始められた太陽の家の生い立ちなどお伺いし、先生の障害者福祉に関するご造詣の深さと、障害者の自立更生に対する強い願いに感銘を受けた次第です。

翌日太陽の家を見学、近代的で立派な施設も然ることながら、そこで働く皆さんが真剣に仕事に取り組んでおられる姿のどの顔もどの顔も明るく、生き生きとした雰囲気は先生の言われる「障害者の真の幸福は生きがいから生まれる」が深く根づいていることをひしひしと感じ、社内外の関係者から話を伺っていたものの、直接お会いし太陽の家を見学して、改めて強い感動を受けたことを思い出します。

二度目にお会いしたのは、昨年の十一月に行われた太陽の家と、三菱商事㈱による合弁会社「三菱商事太陽株式会社」設立調印式の時です。

平松大分県知事や、小尾大分銀行頭取（当時）など大分県の政財界の方々のご臨席も得て盛大に行われました。

頭脳で勝負するコンピュータの仕事に身体障害者が進出すると言うことは、予てから先生念願の事柄でもあり、世界でも類のない画期的な事業で、非常に喜ばれ、旧に倍する情熱あふれる励ましをいただき、調印式にサインをされ、握手を交した時の先生の手のぬくもりは、今も私の手の中にあり消える事はありません。

この会社も間もなく創立一年を迎えようとしております。そして現在十名の身体障害者が正社員としてコンピュータ相手に着実に仕事をして居りまた八名の授産生、六名の訓練生が明日への希望を抱いて働いて居られます。

中村先生がこの様子をご覧になられればいかばかり御喜びの事と思います。その生みの親である先生をこんなに早く亡くすとは思いもよりませんでした。この上はこの悲しみを乗り越え、先生の教訓とご遺志を受け継ぐことが、私共に課せられた使命と存じ、立派な会社に育てて行く所存でございます。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。

「発展途上国を引っ張って……」

日本障害者リハビリテーション協会
会長　太宰　博邦

七月二十三日、中村さんの訃報を聞いて本当とは思えなかった。あのバイタリティに富んだ馬力のある彼のことだから、まさかと思っても不思議でなかろう。しかし事実はもう中村さんは逝ってしまった。何ともいえない淋しさが感ぜられる。

とくに一九八八年のリハビリテーション世界会議の招待を日本に実現したときの努力を思うとき、この世界会議の成功を見ずに逝ってしまったことは残念でならない。

中村さんとの初めての出会いは、昭和三十九年のパラリンピック東京大会の開催準備のころであったと思う。そして以後障害者福祉の同行者としてのつき合いが始まった。別府整肢園の経営、長田しげさんとの出会い、太陽の家の創設、そして身障スポーツの面での国際的活躍等々彼を偲ぶよすがは数尽きない。

彼は生存中他人には出来ない大きな仕事を幾つか成し遂げた。とりわけ次の諸事業は忘れ難い思い出である。その第一は申すまでもなく、太陽の家の創設である。これについては、今更冗言するまでもなく、世間周知のことである。私としては、今日の太陽の家の隆盛を見るにつけ、創業時の筆舌に及ばぬ彼の辛酸苦労は忘れることの出来ない思い出である。その第二は本年四月愛知県下の蒲郡市を中心として行った第一回国際身体障害者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会である。昨年の初めにその話が中村さんからあった時どんなことをやるのか見当がつきかねたし、協会内部にも大会の成功を危ぶむ意見があったりしたが、彼は実行委員長として立派にやりとげた。

その第三は極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会である。アジア地域を中心とした各国を結集してスポーツ大会を初めて日本で行った努力は並大抵ではなかったと思う。身体障害者のスポー

ツに関しては、殆ど関心も知識もなかった発展途上国を引っ張って、立派な大会が出来たのも彼の馬力がものを言ったものであった。

その第四は一九八一年国際障害者年に東京で開催された国際アビリンピックへの貢献である。国内大会は既に一九七二年以来九回実施されているが、これを国際的イベントに高めるについて、彼の果した役割、特に国際リハ協会との折衝や、世界各国の参加招請等に尽力した功績は大きい。そして六十一ヶ国、八四七人の参加のもとに成功裡に開催を見るに至ったのであった。

思えば中村さんは、わが国が、国際的に誇っていい、障害者福祉の先駆的実践者であった。その彼を今失ったことの損失は実に大きい。惜しんでもまだ余りあると言うべきであろう。

われわれは只々中村さんの冥福を祈りながらその志を継いで、我が国の、アジアの、更には世界のリハビリテーション事業の発展に努めたいと考えている。

レクリエーションのため車いすダンスを創作

福祉の町をつくる

大分県社会福祉協議会会長　立木　勝

中村裕先生に就いてはその業績が余りにも大きく広く、何をとり上げてよいのか選ぶに困るのであるが、私の県奉職中は勿論、退任して後も色々と御教示を賜わった事は忘れる事が出来ない。

分けても第一回〝フェスピック〟を日本に而も我が大分県誘致に成功した事も全て先生の身障者福祉、身障者スポーツに果して来られた御功績のもたらしたもので、よって今でも忘れる事は出来ない。

私はその機会に大分県の若い人々にボランティアの精神を植え付けていただいたのを何より有りがたく感謝している。女子高校生等が、不自由な身体を奮い立たせて競技を競う各国選手の姿に自分等も一臂の手を添えているのだと云う自負を見る事が出来て、いい大会を持ち得た事の喜びを感ずるのである。大分のボランティア活動を一段と躍進させる事となったのは云う迄もない。

私が知事を退任した際、早速私に〝太陽の家〟の顧問になってくれと云う話があった。私が今更何のお役に立つ訳でもあるまいが是非にと云う事で御引受して折々福祉工場をお訪ねした。確か〝家〟の役員会の席であったと思う。先生が、〝家〟を退職した高年者達の為の住宅を建設したいと云うことから予而用意されている杵築の密柑園に之を建て、将来福祉の町構想を実現したいと云う発言をされ、役員の意見を求められたのである。私は嘗て知事在任中、中村先生を中心に、大分大学工学部の鍋島先生、県幹部職員退職者外、学識経験者を加え数名の方々に〝福祉の町づくり〟の御研究を願った事があり、間もなくその委員会から貴重な御報告をいただいた事がある。

その報告を拝見した際、私が先ず考えたことは、〝太陽の家〟は今やその界隈に於て〝福祉の町〟を形づくっているのではないか、尚一～二の条件を整えれば立派な〝福祉の町〟に完成されるのではないかと。

従而今蜜柑山の御話を聞いた時も、「新しい〝福祉の町〟を作られる事は将来に亘ってよく研究された上の事にして、高年者住宅は矢張り太陽の家の一角かその周辺に建設されるのがよいのではないか。即ち退職者が折々はなつかしい工場の様子も見る事が出来るし、更に手伝い事でもある時は進んで御手伝いも出来ると云うことが高年身障者の生き甲斐でもあるのじゃないか」と申し上げたことがある。

現にその頃すでに〝家〟の温泉浴場は一般市民の利用にも開放されていたし、アパートの一部も市民の居住が認められていた。〝家〟の〝スーパー〟も市民一般が自由に利用していたし、医療機関も国立別府病院が隣接している。少し離れてはいるが郵便局もある。第一道路事情も周辺すべて舗装され、而も交通事情もそんなに輻奏してなくて車椅子で安全に行動出来る。之は全て理事長が長い年月の間に形成された〝福祉の町〟そのものではないか。一般市民との交流も極めて巧く行っている。私の外に同意見の方もあったので先生も暫く考えて居られたがさしづめ高年者住宅は既存の建物を改築して建設される事に決められた。

尚その後〝福祉の町〟足らざるものとして金融機関を誘致され、大分銀行支店を設置される事になった。

之で理事長の〝太陽の家〟は同時に〝福祉の町〟のモデルをも設けられた事になったのである。

さて杵築の蜜柑山はその後美味しい蜜柑を生産されているが、先生にその後の御考えを伺いたいと思っていた矢先、突然の御逝去で全く残念でたまらない。先生どうか今後も大分の福祉の進展の為に幽界よりの御啓示を賜ります様に御祈り申します。

中村先生を偲んで

財団法人明石会理事長　明石　六郎

余りに突然先生は此の世を去られて、今だにどこかであの温好な慈顔で呼びかけられるような気が致します。

あの若さで当底凡人では成し遂げられぬことをされた天才を、おしみても余りあるものと痛悔致します。

不運な人々に仕事の喜びを与えられ、生きる事の尊さを自からを忘れて打ち込まれた方、それは次代から次代へと永遠に人々の胸に刻み込まれる事と思います。

ここに、衷心より先生の御冥福をお祈り致します。

中村先生の思い出

前太陽の家事務局長　宮野　茂博

中村先生、とうとう先に逝かれましたね。かねてから先生は、私は肝蔵が悪いから局長より先かも知れないよ。一度悪くなった肝蔵が良くなる薬なんてないんだ。それであれだけ多くの肝臓の薬が売られているんだよと笑いながら話をされていたのを思い出します。医者である先生だから、人並の長寿は無理かも知れないと、かねてから覚悟はされてはおられたようでした。しかし日進月歩の現代医療を、どのようにでも受けられる立場におられた先生なのに、こちらもまさかと聞き流したし、先生御自身もも少し位はの思いなきにしもあらずだったのではありませんか。それにしても、少し早過ぎましたね。

先生とは、十余年のお付き合いにしか過ぎませんでした。お酒は殆んど飲まれなかったが、裸の付き合いがお好きなようで、よく夕方から、局長これから湯布院に行こうと、寮の温泉につかりながら、いろいろ将来の構想について話し合ったものです。先生は余程湯布院がお気に入りのようで、湯布院の老人ホーム経営引受けの話や、廃止された中学校跡の施設利用とかの話がありました。空港移転後は杵築方面が有望だとする私と屢々意見の異なることがありましたが、われわれの意見もよく聞き入れて呉れたものです。

しかし云い出すと却々後に引かぬ強引な面もあり、いつぞやは、例によってこれから湯布院に行こうと云い出され、今日は山の方の雲行きが悪いから思い留っては如何ですかと云ったのですが、とうとう一人で出掛けられ、サファリーの手前の雪の山中で立往生。だんだん暗くはなるとて、急報で救援に出掛けた一幕もあり、今となってはなつかしい思い出です。

先生はいつだったか、座右の銘は何かと問われたことがありました。私は、それに当るかどうか分らないが、色即是空空即是色の言葉が戦地以来三十余年わかったような、わからないようなの繰り返しですよと答えると、先生は生老病死とはむつかしいものだ、私は医者だからそれで生活しているんだと笑いながら、それにしても、太陽の家の障害者の中にも、ぼつぼつ定年者が出始めた、今まで障害者が生きて行くこと、働くことを考えるだけで精一杯だったが、障害者の老後のことも考えねばならないなと、老後施設から、共同墓地まで構想は次々と拡がる許りでした。

東京パラリンピックに日本選手団々長として参加。

中村先生の構想からすれば、現在の太陽の家はまだまだ手始めで、今後夢は無限に拡大され、また着実に一歩一歩実現されて行った事でしょう。

あ、、天命か有情か無情か、神仏はここらあたりでと、この世での仕事のお休みを命ぜられたのでしょう。しかし太陽の家と云う偉大な足跡を残されました。キリストは若くして十字架を負うことによりその教えを全世界的なものに発展させ、千利休は賜死により今日の茶道を残したとも考えられます。

中村先生は志半ばに早逝されることにより、太陽の家の理想は、後世に永く引き継がれる事でしょう。余命を太陽の家の発展のため捧げられた先生の御冥福をお祈り致します。

太陽の家誕生の頃

大分中村病院理学療法士　河野　昭五

太陽の家の創設をその前から見てきた者は、もう畑田理事長と私だけになってしまった。

話は中村先生の廻診から始まる。イギリスでの経験を踏まえ、脊損者を前に「何かいい仕事はないかなァ」という事から、別府義肢の三吉さんにまず一人雇ってもらい、同じく身障者である竹細工の並松さんに話しを持って行き、彼から「どこか場所があれば、何人かの仕事は確保しましょう」と約束をとりつけた。今から思うと、ホンのお粗末な状態であったが、あの時彼等がとりあってくれなければ、今の太陽はなかったと云える。特に三吉さんは、太陽の草創の頃、日常の運営のため自分の商売の金をつぎこんでもらった事すらある。

太陽の建設の計画が次々と発展していったある夜、先生がご自宅でしみじみ「こんな大それた事が自分に出来るだろうか、体もこういう苦難に耐えられると思われない」と語られ、「先生、折角やりかかった事です。いくら苦しくとも、これを実現すれば、いつかは多くの身障者が感謝する時が来るでしょう」と私。一見順風満帆と云える太陽の成長の蔭にも、こんな話は数知れずある。

「先生、安心してお眠り下さい」

元太陽の家職員　丸山　一郎

中村先生が亡くなって、多くの人と同様に、大きな目標を失ってがっかりしている。先生は、私の師であったばかりでなく、同志として更に誠になまいき乍ら、この分野における私にとってのライバルを感じていただけに、去られてしまうと、向っていた山がポッカリ消え失せてしまった惑いと寂しさで心が一杯である。

先生の訃報を受けたのは、奇しくも先生が産みの親ともいえる全国身体障害者スポーツ大会の下見のため京都駅についた直後であった。ご一緒していた、先生とはご縁の深い井手スポーツ協会常務理事（元更生課長）や、八木東宮待従とともに深い悲しみと落胆の中で、先生のこの二十年にわたる功績を語ったのである。

私にとっての二十年は、正に中村先生とのつき合いの二十年といっても過言ではない。昭和三十九年の東京パラリンピック準備の時に先生と出会って以来、亡くなる九日前に大分県の研究会で同席する迄の二十年間、先生に導びかれてここまで来た気もする。そして、まことに因縁を感じるのであるが、先生の叙勲を葬式に間に合わせる仕事を私が仰せ付かる程、最後の最後まで先生に使われていたのも不思議なご縁である。

二十年間における先生を語ることは到底できないが、いくつか先生のあの超人的なエネルギーを発揮していた中での姿が、浮んでくる。

●三十九年秋、東京パラリンピックの選手村、早朝先生は我々通訳奉仕団員に「各国の選手のションベン袋を集めてきよ」と命じた。口のまわりにパンくずをつけたままである。華やかな大会において、日本の補装具類の遅れを見逃さず、研究をする為であった。

●東京パラリンピックの開会式、スタンドに座った先生は、会が始まると下を向いたきり列に最後まで顔を上げなかった。この大会の実現までの苦しかった道のりや様々な感慨から涙が止まらなかったからだと後に話された。

●昭和四十年五月の先生から戴いた手紙がある。先生らしいゴツゴツした字で、「……。私は社会福祉や、リハビリテーションといった事はよく分りませんが、今迄日本で人のやらなかった様な事を之は身障者の為になるというので信念をもって二、三して参りました。どうやら道は開けたものの全く色々の抵抗、反対に会い苦労の連続でしたよ……。日本の社会位、ボランティア活動に不適な国はありません。……」と、先生の下で働きたいと考えた私に再考するようにおっしゃり乍ら、ヤル気なら自力でやって来いと勧めて下さった。

それから、東京と大分で、或る時は外国で、実際に先生の下で働きながら、先生の強烈な力や、休みを知らぬエネルギーに圧倒され通しの二十年であった。今だに先生の行動パターンや戦略は、私の想像を超えている。個人の感情等は蹴散してしまう強引さや横暴な面も。「そんな事では、俺の生きている内にはデキン！」と正にブルドーザーの如く走りつづけて、先生はゆかれてしまった。

二十回目の奈良の大会は大変立派な暖かい希望にあふれるものであった。五千人を超えるボランティアに支えられて、全国二千人の選手が参加した。スタンドには、四年後のパラリンピックを開催する韓国の組織委員会の人々が見守っていたが、先生が最後までソウル開催のために努力されていた大会である。三万人の観衆の唱う〈パラリンピック賛歌〉を先生への鎮魂歌として私は聴いていた。そして先生に語りかけたのである。「先生、安心して下さい。大丈夫ですよ」と。

（厚生省社会局身体障害者福祉専門官）

「お前」との四季

久米　祥生

山荘のあるじ好みの茂りかな　示　羊

「年中みどりの樹なんて嫌だ。思ひきり茂った後は、潔ぎよく散る樹が好き」と云ってゐた。夏の山荘での「お前」

答へたる声が霧より顔となる　示　羊

あの日の様に　又霧の中に　お前の姿を見失ってしまった。

由布に一人で行って俺が呼んだら　霧の中から答えてくれよ、顔を出してくれろよ、いいか「お前」

名声の淋しさを炉に聞きもせし　示　羊

二人にしか判らぬ淋しさもあったね。

そんな夜は、さっさと酒で寝てしまってゐた俺。休む事を知らず、褶の生命を燃やし続けてゐた「お前」

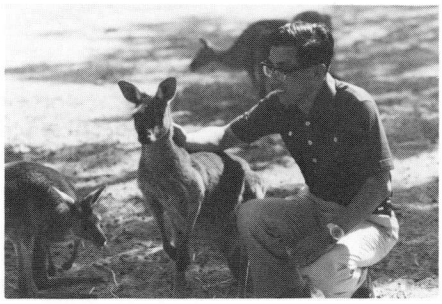
そして春

メス老ひし医と爪古りし猫と炉に　裕

疲れた心境を詠み「もう俳句を友とするぞ」「うら、かに生きるぞ」と、俺を安心させ　あれ程固く約束したのに「お前」

三十餘年の交友の　これから「春」の部が初まらうとしてゐた矢先に「お前」

（北九州市・久米整形外科医院）



偉大なる先駆者は逝きて

ロイヤルパース病院　整形外科部長
ジョージ　ベットブルック卿
（オーストラリア）

一九六四年東京パラリンピックで中村裕博士と出会った私は、初対面の瞬間から、精気みなぎる活動的な整形外科医に魅せられた。彼は一九六一年、日本初の身障者スポーツ大会を大分市で開いている。彼の故郷で生まれた小さな灯は、あっという間に日本中に拡がり、ストークマンデビル大会を招聘するに至った。以来二十年間の親交である。彼も私も、両下肢マヒ者救済の道を求めていたので、情報交換を重ねるにつれ、確固たる友情が育まれていった。

一九四〇年代前半、彼はルドヴィッヒ・グットマン卿の下で学んでいる。ここで啓発され、帰国後は大分で両下肢マヒ者の治療に専念するだけでなく、彼らの就労をも目指した。そのころ、ISMGF執行委員会の日本代表にも選ばれ、ISMGに毎年参加する日本チームの責任者としての一翼も任うことになる。彼の示した医学的、職業的、社会的治療の好例が日本政府を大きく動かしたことは疑いをえない。日本政府が急に全国に素晴らしい両下肢マヒ者用センターを設立するようになったのは、六四年から七〇年にかけてである。

六五年に、彼はわずか七人の障害者と太陽の家を始め、六六～六七年にはその奮戦ぶりをよく耳にした。五七～五八年に、西オーストラリア・パラプレジア協会が、ごく少人数で工場を創業したので、彼の活動は興味深いものだった。ほんの小さな出発が、何と大きく成長したことか！　七〇年代前半に、彼はオーストラリアを訪れ、私の故郷パースで数日を過ごし、両下肢マヒ者や四肢マヒ者に関する多くの問題を討議することができた。

太陽の家と大分中村病院は、彼のすばらしい経営手腕により、急速に成長する。彼は、あちこちどこにでも現れ、駆けめぐっていたようだ。彼を訪ねた者はいつも手厚いもてなしをうけ、その業績に深く感銘してもどってきた。私の生涯で悔いを残すことがあるとすれば、彼の生存中に太陽の家を訪門できなかったことがあげられる。私は、彼が太陽の家について書いたものは全て拝読し、彼の構想を拝聴し、壮大な身障者の就労活動の発展を見守ってきた。太陽の家は日本だけでなく世界中のよい手本であるに違いない。

彼が国際パラプレジア学会に入ったのは、六十年代半ばを過ぎてからだったが、以来長年に渡って学会のために奉職してくれた。彼が副会長を務めた七十年代後半から八十年代初めにかけては、学会の活動も盛んで、副会長として世界中の両下肢マヒ者のために献身し、その責務を全うしたといえる。例えば八二年ごろは、韓国カトリック医科大学聖メアリー病院整形外科部長と定期的に連絡をとりあい、韓国のマヒ者対策の現状を調査したりもした。

その後彼は、香港を足がかりに中国本土へ視野を拡げ、現在もなお包括的治療サービスが整備されていない中国の両下肢マヒ者、四肢マヒ者に関する見事なレポートをまとめ、国際学会に提出した。最近は八三年にも再度訪中し、パラプレジア治療の活性化のためにいろいろな病院に寄金を行っている。

彼の興味は幅広く多様だ。一九七〇年代前半にはフェスピック大会を創設し、フェスピック協会は、死に至るその時迄、彼の最大の関心事だった。中村委員長のイニシアティブの下、フェスピックの初代執行委員たちは、オーストラリアやシンガポールで何度も会合をもったが、そうした時々の彼の熱血漢ぶりが思いだされる。フェスピック大会は、今やマヒ者のための、よく整った活気ある大会となり、地域のほとんどの国が参加するようになった。これも、桁はずれの男、中村裕の努力と精力とに負うところ多大である。

彼は、長年ISMGFの執行委員も務め、アジア地区のパラプレジア治療サービス確立のため、調査や援助にもっと時間をとりたいという希望から勇退した。また、日本パラプレジア医学会の設立にも貢献し、六六年には日本初の学術的学会を別府で開いている。死の直前の手紙で、彼は、この学会の意義がいかに大きいかを語っている。学会会員は七百人を超えるまでに成長した。彼は国際パラプレジア学会と日本との架け橋でもあり、ジャーナル・オブ・パラプレジアの日本語版出版、また、日本人会員の事務手続き援助等も手がけていた。

彼は整形外科、神経外科、泌尿器科等の学会とも積極的に接触してきたので、そうした分野でも彼の死は惜しまれることだろう。日本や東南アジアの国々の適切なパラプレジア治療を推進する上で、彼の友情と指導力はほんとうに大きな役割をはたしていた。

職業技能を競うアビリンピック、好評を博したレスポも、彼が始めた。こうした大会は今後も続き、この創始者のことも忘れられないだろう。

日本の両下肢マヒ者、四肢マヒ者たちは、二十年間で多くを手がけ多くをなしとげたこの偉人に恩恵を被っている。死後もその教えが踏襲され、事業も発展していくような人物は、真に不滅だといわれている。中村裕は、まさにその例にあてはまるだろう。

彼に贈られた最後の栄誉は、国際パラプレジア学会シルバーメダルだった。これは、パラプレジアの分野で顕著な業績をなした人に贈られる国際的賞で、議会の満場一致で中村博士への授与が決まった。彼はデンバーの会議に参加できなかったため八四年末に私が贈呈することになっていた。結局メダルは日本領事の御好意でオーストラリアから特別に輸送され、壮厳な儀式の中、中村夫人の手に渡り、偉人の墓前に捧げられた。

私たちは彼を忘れることはないだろう。世界中、特に長年多大な援助をしてきたアジアの人々の思い出の中で、中村裕は生き続けるだろう。オーストラリアには、彼と親交のあったリハセンターも多く、そこの医療スタッフやたくさんの友人たちの間で、彼の名は不滅のものとなるだろう。

八三年ストークマンデビルでの国際学会の楽しい日々は、彼と私の最後の思い出となった。その時も健康そうには見えなかったが、いつもの不屈の根性で頑張っていたようだ。彼の死は残念この

上なく、ただ、おだやかに安らかに旅立ち、後継者たちが後をひきついでくれたことが、唯一のなぐさめである。

太陽の家と大分中村病院は親しい友を失い、日本は屈指の先駆者を失い、東南アジア地域は二十年間奉職した偉大な医者を失い、国際パラプレジア学会は忘れえぬ偉大な研究者を失った。

この機会に夫人と御家族の皆様に、私の心をお伝えしたい。時が過ぎゆくにつれ、彼の業績は日本やアジアで拡がり、今よりなお価値のあるものとなっていくであろう。

中村裕追想

国際リハビリテーション協会前会長　ハリー　ファン（香　港）

中村裕――壮大なビジョンの国際的人物、世界中の身障者があたりまえの権利を獲得するために貢献した先駆者、そして、障害者の苦境を救った戦士――

一九六八年香港で開かれた第四回RI汎太平洋会議で、私は初めて彼と出会った。彼は脊髄損傷に特に興味を持つ経験豊かな整形外科医だった。一九七〇年代初め、パラプレジア治療の父、ルドヴィッヒ・グットマン卿が香港を訪問した時のことを思いだす。グットマン卿は、中村先生がストークマンデビルで学んだことに触れ、数ある弟子の中で、中村とジョージ・ベットブルックが最も優秀な弟子だと語った。まさにそのとおりである。ジョージはオーストラリアでの偉大な業績とスケントンパークパラプレジアセンターの設立で爵位を受け、一方裕は、わずかの脊損者と始めた太陽の家を、世界に冠たるものに育てあげた。今や、この二つのセンターは、リハビリテーション分野のメッカとなっている。

中村先生は、日本での障害者の認識是正のために戦い、実業界や一般社会の姿勢をかえ、障害者の雇用、しかも、利益をあげる雇用を確保した。彼のモットーは『障害者に慈善ではなくチャンスを』だった。彼は、大分県別府市に車いすの人々のためのユニークな街をつくり、最近は蒲郡市に第二太陽の家を設立、第三太陽の家も計画途上にある。太陽の家のような施設を、香港やネパール、中国等、アジア汎太平洋地域の各地に設立するのが、彼の夢だった。

また、彼は、人間の幸福のためには健常者同様障害者にとっても、レクリエーション・スポーツ活動が不可欠であると確信していた。彼は、日本の身障者国体、今や国際的に名高い大分車いすマラソン、フェスピックの生みの親であるが、死の直前には第一回国際障害者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会（レスポ）を催している。こうした大会は内外で障害者の生活にはかりしれぬ影響を与えた。

障害者の国際的技能コンテスト、アビリンピックも、中村先生が発想し、日本が大成功のうちに世に送りだした重要で画期的な大会のひとつである。一九八五年にはコロンビアのボゴタで第二回大会が開かれるが、その時もまた、彼の死は、大いに惜しまれることだろう。

リハビリテーションの分野で、特に障害者のための民間組織としては最大のRIにおいて、中村先生はアジア汎太平洋地域代表の副会長として、また、レジャー・レクリエーション・スポーツ委員会の初代委員長として、多大な貢献をした。

一九八四年四月十四日、中国首相にRI会長として私から八十年チャーターを献呈した時、彼はRI代表団のひとりだった。それが、海外で果たした最後の公務となったわけだが、既に健康を害していることを自覚していたようだ。中国を訪問し何らかの援助をしたい。この十億の民の住む中国で障害者問題ととりくみたい、これは彼の終生かわらぬ夢のひとつだった。実際彼は、一瞬も無駄にしなかった。滞在中に、中国の身障スポーツマンを日本へ招待したいという意向を示し、日本から中国へ六十六台のスポーツ用車いすの寄贈を約束した。彼はほんとうに約束を果たし、中国で車いすスポーツが始まったのである。今年十月、安徽省合肥で開かれた第一回中国身障者国体において、私は中国で初めて行われた車いすバスケットを見ることができた。

私にとって、そしておそらく、全世界のリハビリテーションに携わる者にとって、世界中の障害者のために心魂を捧げた男〝中村裕〟はひとつの伝説である。その不朽の業績は、いつまでも人々の心の中で忘れられることはないだろう。

中村　裕を偲んで

障害者の村ヘットドルプ創始者　アリ　クラップワイク（オランダ）

中村裕追悼集のための原稿を依頼された時、私はもちろん協力を約束した。協力しないなどということがあろうか！

しかし、それは私にとって重苦しいことだった。中村裕がこの世を去ってからまだ日も浅く、七月二十三日以来ほとんど毎日、妻と私は彼の思い出を語り、他の人々に彼について話してきたのだから。こんなことをいうと普通ではないと思われるかもしれない。

しかし、中村裕は尋常の枠を超えた人物だった。特別な…おそらく、その多才ゆえに特別な……。私たちの親交はこうして始まった。

一九七五年のある日曜日、彼は私の創設したヘットドルプ（アーヘン市、四百名の重度障害者の生活するコミュニティ）を訪れた。その時、私はオランダにいなかったが、彼は帰国後、障害者問題の発展について手紙で私に助言を求め、私を日本への講演旅行に招いてくれた。詳細にわたる往復書簡の後、私の初めての日本訪問は実現し、一九七七年五月十七日、別府で初めて裕と会ったのだった。深く長い親交の始まりである。講演旅行は、別府・岡山・東京と計画されていた。

岡山のホテルに着くと、裕と私たちは翌朝八時十五分に朝食を共にする約束をした。私はよく、彼の親切と心遣いの好例として仲間たちに話すのだが、朝食前の七時三十分に、私は部屋で裕からこんな電話を受けたのだった。『朝食でもうすぐお会いしますが、今、何か私にできることはありませんか』もうひとつ、彼の人柄を示すエピソードがある。

四年前、妻と私は再び招待を受け、日本を訪れた。一九八一年十月の第一回国際アビリンピック（東京）の折だった。滞在中、私は六十回目の誕生日を祝うはずだったが、妻も私も、場合が場合だけにその日のことは忘れていた方がいいだろうと思っていた。しかし、私たちのホストが中村裕、広子夫妻だということを計算にいれていなかったようだ。驚いたことに、赤いベレーとちゃんちゃんこという純日本式の還暦の祝いが準備されており、忘れえぬ夜になった！　裕は私たちの最高の友だった。

整形外科の専門医としても、私は裕を尊敬している。一九七七年、私は彼の病院を訪問した。聡明な医者として、彼は自分のしていることとなすべきことを心得ており、患者たちとの人間的交流を大切にしていた。それも、一流のユーモアもあってのことだから、医師中村裕を知ることがいかに素晴らしいことか、おわかり頂けるだろう。

しかし、障害者のための完全医療の分野においてこそ彼は並はずれた能力を発揮している。そんな時、特に彼の非凡な才能を感じる。裕は、整形外科の名医のみに納まってはいなかった。

彼の障害者に対する考え方、つまり機能障害の重い人々が短期間の訓練の後〝労働やスポーツ活動〟に参加していく過程に、私は感銘した。

一九八一年の国際障害者年よりはるか以前に彼は、『完全参加と平等』というモットーの両方を実践していた。短期間で障害者スポーツを、日本ばかりか東南アジア南太平洋地域にまで拡めたのは、信じられぬことだ。フェスピックは彼の啓示的指導力の下、立派な組織に成長し、世界中で、リハビリテーションやその後の進展に効果的なスポーツの分野に対して数々の重要な貢献をしている。太陽の家の設立で、多くの人々がよりよい生き方をすることができるようになり、彼の好んだいい方をすれば、〝満ちたりた幸福な人生を楽しむ〟ようになった。

もちろん、彼の考え方を発展させるには、それだけでは十分といえない。彼の大会主催者としての能力もまた、その理想実現に一役果たしている。第一回国際アビリンピック（東京・一九八一）や第一回国際障害者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会（レスポI・蒲郡市・一九八一）のような国際大会を成功させるための苦労を知る者なら、誰もが私同様、彼に敬意を払うことだろう。また、大会の間、彼は個人的接触に時間をさき、気軽にジョークをとばし、リラックスして、一般参加者のように大会を楽しむのだった。

裕夫妻は今年八月第一週を我家で過ごすことになっており、私たちはこの休日を楽しみにしていた。広い意味でのリハビリテーションの将来について、シンポジュームや会議に煩されることなく論議できるはずだったのに……。特に、第二回レスポについて膝を交えて話すつもりだった。彼はこのレクリエーションスポーツとレジャーの国際大会が一九八六年アーヘン市で開かれることをとても喜こんでおり、第一回大会直後一九八四年五月十日付の手紙でこう語っている。『海外から頂くお礼状はとてもうれしいものです。でも、私にとって最も喜ばしい贈り物は、あなたが八十六年の第二回レスポ開催をひきうけて下さったことでした。』

七月第一週に裕から、残念だが病気のため渡欧できないという手紙を受けとった。その三週間後彼の死を告げるメッセージを電話で聞いた瞬間のことは忘れない。

最後にもう二点付け加えたい。

私と同じように喜こんで彼と協力してきた人なら同意してくれると思うが、中村裕は自分がどれほどのことをなしとげてきたか気づいていなかった。広子夫人や彼の仲間の援助なくしてはやりとげられなかっただろうが、彼は確かに、計画の実現可能性を把握し他の人々を導きつつ、伸びていく方向を先取りしていくという偉大な武器を持っていた。

私たちは、生前、裕が私たちのためにやってきた多くのことに対して感謝しなければならない。また、私たちの感謝の気持ちが、他の思い出と共に広子夫人の慰めとなることを心から祈る。

中村裕は、私たちに明快なメッセージを残している。『自分より少しだけ不幸な人の幸福のために働き戦うことは価値あることだ。そして、困難なことでも、熱意ある人々が力を合わせればなんとかなる。』

裕、君が残してくれたもの、そして、今もなお与え続けてくれているもの全てに、私たちはつきせぬ感謝を捧げたい。

偉大なる友・中村先生

国際ストークマンデビル競技連盟会長
ジョン　グラント
（オーストラリア）

一九八四年第七回世界車いす大会開催中、中村裕博士の訃報に接し、私は個人的に大きな衝撃にうたれた。中村先生はオーストラリアでも高名で、彼をよく知っている私たちは、かけがえのない友を失ってしまった。彼はとても個性的であっただけに、彼の代わりを見つけることはできない。外科医でもあり、また障害者問題の世界的リーダーでもあった裕と親交を深めることができて、ほんとうによかったと思っている。彼ほどに、東南アジア汎太平洋地域に大きな影響を与えた人はなく、また彼のなしえた功績のかけらほどもなしとげる人はないだろう。

彼は九州の大分市で外科医としての研鑽を積み世界的水準の外科病院を作りあげる一方、労働を重視する独自のビジョンも大きく育てた。太陽の家は、彼の〝非凡さ〟を示すものといえる。フェスピック大会の創設も彼の関心と実行力とに負うところ多大で、きっとこの大会は彼の業績の記念碑として続いていくことだろう。

彼は、東南アジアのためだけでなく、ＩＳＭＧＦの執行委員としても貢献した。この執行委員会で彼の穏かな影響力と偉大な英知を失うのは大きな損失である。

医学、またはその関係分野を離れても彼の興味は多種多様で、彼の家族やその家庭環境に触れるのは愉快なことだった。彼はよき家庭人として、家族ぐるみで音楽や文化を愛し、楽しんでいた。

また、珍しい骨董品の収集家でもあり、彼のわらぶき屋根の別荘、収集館、野鳥の戯れる庭園を訪門したのは忘れえぬ思い出である。

友人として、その生涯を黙々と仕事に捧げてきた人物の死に哀悼の意を表すとともに、偉大な業績に思いをはせつつ、御遺族に対して、心からお悼やみ申し上げる。

中村先生と私

社会福祉法人聖再院理事長
南　諰均（韓　国）

七月二十三日、中村先生の御逝去を告げる電報を受けとった私は、しばし茫然として我を失った。間違いであることを祈りつつ日本へ電話を入れたが、それは真実だった。その瞬間、これまでの友情に満ちた思い出の数々が走馬灯のように蘇えってきた。

私の記憶では、彼と初めて会ったのは一九六七年七月初めのこと、秋山ちえ子女史の紹介だった。私は医者として身障者の役にたちたいと聖再院という小さな施設を設立したが、当時の韓国はとても貧しく、国も社会も、障害者のための仕事を経済的に援助することなどおぼつかなかった。私は個人的に全運営費を賄わねばならず、能力の限界を感じていたが、ついには、大きな負債を抱えこんでしまった。私は、旧友の経済的援助を求めて訪日するが、運悪く、その友人の会社も倒産してしまった。何かを得ずして国に帰りたくはない。医療訓練について学ぼう。そう決心して私は、コスモポリタン北リハビリテーションセンターの山本副理事長を訪ねた。山本氏は快く私を受け入れて下さり、一年間脳性マヒ治療に従事することになる。秋山女史が私を中村先生に紹介してくれたのはその年である。中村先生は高名な医者であると同時に身障者雇用に成功した太陽の家の創立者でもあるということで、秋山女史は私に、中村先先と会うことを強く推め、そのための旅費を全て負担して下さった。

初めて太陽の家を見た時、私は圧倒され嫉妬さえ感じた。その印象と羨望とが、私に『韓国の人々のために同じような施設を作ろう』という決心をさせたのである。その時案内して下さったのは現在厚生省社会福祉専門官の丸山一郎氏であった。中村先生はできる限りの援助を約束して下さり、私は勇気と希望を得た思いだった。

二度目に彼と会ったのは翌年の五月、太陽の家さくら寮が完成した時で、彼は親切にも我センターの子供たちを招いてくれた。当時の韓国は海外旅行が難しく、私たちの旅は人々にうらやまれたほどだった。こうして、私たちの友情は続いたが中村先生にはいつも助けられてばかりだった。

一九七五年には五人の子供たちの技術訓練を太陽の家に依頼し、快く引きうけてもらった。その五人の太陽の家滞在中、第一回フェスピックが中村先生の提唱で開催されている。彼は五人の子供たちを集中的に訓練したらしく、十九ヶ国中第七位を占めることができた。一九七六年五月、ついに私たちは中村夫妻と十人の身障労働者を聖再院にお招きし、歓迎パーティーと音楽会で先生の友愛に報い、楽しい時を過ごした。韓国で会えたことが、私にとっては大きな喜びだった。

以来、国際的シンポジウムや会議で度々再会したが、そのつど彼のエネルギーと壮大なビジョンに感心させられた。また、日本に行くたびに別府を訪れ、太陽の家の急速な発展に目をみはったのだった。七八年、聖再院の五十床の病院が韓国政府の援助で完成した際は、再び中村御夫妻をお招きし、共に喜んで頂くことができた。

最後に彼と言葉をかわしたのは、第一回国際障害者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会の時だった。それは二十五ヶ国の障害者が集まった大スペクタクルで、先生の政治力、人道的博愛主義、誰も模倣できないアイディアは、私たちの想像を絶するものだったといえる。

彼の急逝はたしかに悲しいことだが、最期の瞬間迄障害者のために身を尽くし、人生を捧げたのである。彼はいつも「障害者の仕事に国境はない。どの国にでも、できることなら喜んで協力する」と言っていた。彼の世界的視野にたった構想、友情、愛はいつまでも私たちの心の中に残るだろう。

中村先生との思い出で、私には忘れられない一本の国際電話がある。それは、八八年ソウルで開かれるはずのパラリンピックについてであった。オリンピック開催国は、パラリンピックを行う優先権があるが、韓国政府はパラリンピック開催の考えはなかった。中村先生はこのことを恐れ、パラリンピックの韓国実現を目指し、あらゆる努力をしていた。私にもできる限りのことをするよう強く要請され、国際ストークマンデビル競技連盟執行委員会の様子を常に報告して下さった。スクルートン事務局長が第三回大分国際車いすマラソンに招待され大分市の中村家に滞在しているので、八八年パラリンピック開催を申し出て、女史の出国前に確約をとりつけるようにとも電話を頂いた。ＩＳＭＧＦ執行委員会の中でただひとりアジアを代表する中村先生は、韓国の現状を説明して開催国の最終決定延期を要請した。私は当惑したが、厚生大臣に会い八八年ソウルパラリンピック開催の合意をとりつけた。韓国テレビがこのニュースを報じるとすぐに、私は中村先生に電話を入れ、この吉報を伝えると共に御尽力に感謝申しあげた。できるだけの援助を約束してくれた先生が八八年パラリンピックを前にこの世を去らねばならなかったとは、運命の無情を思わざるをえない。

一粒の種のような先生の献身的な人生は、きっと豊かな実を結ぶに違いない。一粒の種が無数の実を結ぶ如く、中村先生の蒔いた種は多くの国のたくさんの人々の間で芽を出し、世界中の障害者のためにより豊かな実りをもたらすだろう。

彼ほどに精力的に、実践的に、そして大担に仕事を進めていける人がいるのだろうか。御遺家や広子夫人、共に働いてきた人々が彼の偉業を受け継ぎ、障害者の幸せを実現してくれることを望む。

我永遠の友、中村先生、あなたはきっと障害者のための仕事を見守り、勇気づけて下さるだろう。

広子夫人はじめ御遺族の方々、また中村先生の残した傑作である太陽の家に神の祝福あらんことを祈る。

Dr. Nakamura and I

Dr. Si Kyun Nam (Korea)
President
Sung Sae Rehabilitation Center

On July 23, 1984 when I received a telegram telling of Dr. Nakamura's death, I became numb with shock for a while. I made a overseas call to Japan expecting to hear that it was not true. But the answer was that it was true. At that moment, memories of all my fellowship with him in the past sprang in my mind.

As far as I remember, I met him in early January, 1967, for the first time. The person who made that meeting possible was a Japanese critic, Mrs. Chieko Akiyama. I was a doctor in Korea who tried to work with the physically disabled hoping to make a meaningful contribution to them, and founded a small institute, "Sung Sae Rehabilitation Center". In those days, my country was so poor that the nation and society were unable to support the work with the disabled financially. Therefore I had to personally meet all expenses for the Center and run it by myself. But I found the limit of my ability and it finally ended up deeply in debt. I visited Japan to ask financial aid of my classmate, Mr. Shin, however unfortunnately his company was bunkrupt. I did not want to come back to my country without any results and decided to learn something about medical training in Japan. That decision made me visit Cosmopolitans Kita Rehabilitation Center of Japan and Mr. Yamamoto, Vice-President of the Center, was willing to allow me to work in the field of therapy for cerebral palsy for one year. It was that year that Mrs. Akiyama introduced me to Dr. Nakamura. She strongly recommended me to meet Dr. Nakamura, the Founder of Japan Sun Industries which were the most successful case of employing the physically disabled and a famous doctor, and gave me all expenses for a round trip to meet him.

When I visited the Industries for the first time, I was greatly impressed and envious of it. That impression and envy gave me the motivation to build the same kind of institute in Korea for my people. At that time the person who guided me was Mr. Ichiro Maruyama, who is at present in charge of Rehabilitation Dept. of the Health and Welfare Ministry in Japan. Dr. Nakamura promised me to help whatever way he could, which gave me courage and hope.

It was the next May when a new dormitory was established at Japan Sun Industries that I met him again. He kindly invited the children of my center. Those days in my country, travelling overseas was very difficult and our visit to Japan was enviable for the other people. Mrs. Hashimoto was very helpful for our trip. In this way, our friendship continued and Dr. Nakamura was always a helper for me.

I asked him to give five children of my Center technical trainings for one year at Japan Sun Industries in 1975. He was pleased to accept my request. While the five children were staying at Sun Industries, the 1st FESPIC was held under the leadership of Dr. Nakamura. They were trained very intensively by Dr. Nakamura and also took the 7th position of the 19 countries in the FESPIC.

In May, 1971, finally I could have an opportunity to invite Dr. and Mrs. Nakamura and ten disabled workers of his Industries to my Center. We held a welcome party and music concert to reciprocate his friendship and had a very good time. We were glad to see them again in Korea.

From then on, I often saw him at the international symposia and conferences. Every time when I met him there, I was very impressed by his energetic personality and great vision. Also whenever I went to Japan, I visited Beppu-city and saw the rapid development of Japan Sun Industries with surprise.

In 1978 when our Rehabilitation Hospital with fifty beds of my Center was completed with the aid of Korean Government, I invited Dr. Nakamura and his wife to share my joy with them.

The last time when I talked with him was at the 1st Int'l Meeting on Leisure Recreation and Sports for the Disabled(RESPO) held in Japan in April, 1984. The Meeting with the disabled participants from 23 countries and territories was a grand spectacle. His excellent political ability, humanitarian philanthropism, his unique ideas that nobody could imitate made the Meeting successful. It was beyond our imagination.

Even though it is very regretful that he suddenly passed away, he dedicated himself to the work for the disabled to the last moment of his life and sacrificed his valuable life. He always said, "There is no boundary for the work of the disabled. If I can be of help to any country, I'm willing to do anything I can and cooperate with them." His worldwide vision, friendship and love will always remain in our minds.

In my memory of Dr. Nakamura, I had one overseas call from him which I'll never forget. It was about '88 Paralympics which must be supported to be held in Seoul because the host country of the Olympics has a priority of Paralympics. However the Korean Government had no idea of holding Paralympics. Dr. Nakamura, being so afraid of it, tried to make Paralympics in Korea possible. He urged me to do all that I could. He continually let me know the actions of the Executive Committee of ISMGF. Once he called me saying that Ms. Joan Scruton, Secretary General of ISMGF, was staying at his home in Oita-city. As she was invited to the 3rd Oita Int'l Wheelchair Marathon as a guest and planned to go back to England soon, he told me to arrange to accept immediately the host of '88 Paralympics in Seoul and to get permmission by all means before her leaving Japan. The only member of the Executive Committee of ISMGF in Asia, Dr. Nakamura explained the situation of my country and ernestly requested to delay the final decision. I was embarrased but I met the Minister of Health and Social Affairs. We then made the arrangement to hold '88 Paralympics in Seoul. Soon after Korean TV announced this news, I made an overseas call to Dr. Nakamura to tell him this good news and give my thanks for all his efforts for making it possible. When he heard it, he was pleased with me and promised to see me at '88 Paralympics and to assist me with great cooperation. I cannot help feeling heartless in the fate that Dr. Nakamura had to leave this world before the coming Paralympics.

I'm sure that his dedicated life like one wheat seed will bear good fruit. As if one wheat seed had to decay to bring the result of bearing hundreds of thousands of fruit, I certainly believe that the seed sown by Dr.Nakamura will begin to spread through many people in the whole countries and will bear more fruit for the disabled in the world.

I'm wondering who can lead the works that he did in energetic, practical and widescale way, but I hope his family, his wife Mrs. Hiroko Nakamura and his colleagues will succeed the works which he left and can firmly make more fruit to achieve "the Disabled's Happiness".

My everlasting friend, Dr. Nakamura, I believe that you are watching over our works with the disabled and encouraging us from the heaven. May God give peace to Mrs. Hiroko Nakamura and the family, and bless them as well as Japan Sun Industries which are masterpiece created by him.

"See from page 27"

At 7.30 am. Yutaka phoned my room : 'we will see each other later on at breakfast, but . . . do let me know if there is anything I can do for you now! '

Another example of his very personal care :
Four years later, we made a second visit to Japan - - my wife had again been invited this time as well. Now on the occasion of the First International Abilympics for the Disabled' in Tokyo, Octobcr 1981. During that period I was going to celebrate my 60th birthday. My wife and I realized that under those circumstances we would better forget that day. But that was reckoning without our hosts Yutaka and Hiroko Nakamura! To our great surprise, they made it into an unforgettable evening, with baret and jacket, completely in the Japanese style!
Yutaka was a great friend of ours.

As a medical specialist : orthopaedic surgeon I came to admire Yutaka. In 1977 we made a 'Big round' in his clinic : an intelligent medical doctor, he knew what he was doing and needed to be done without losing sight of the human relationship with his patients. When you know that all this is accompanied with an immense sense of humour, you will understand what a great pleasure it was to have known Yutaka as a medical doctor.

But there is far more to the field of integral medicine and care for the disabled. And that is when you will come upon the level of a most extraordinary personality. • Yutaka did not confine himself to 'just' being a valuable orthopaedic surgeon.
He impressed me with his views on the disabled human being, by developing shortly after his training into an advocate of "labour and sports"also for people who are severely handicapped in their functioning.

Long before the International Year for the Disabled -- in 1981 -- he put into practice both aspects of the motto : 'Full participation and equality'. It seems incredible, considering the comparatively short period, that he could promote sports for the disabled not only in Japan, but also in the Far East and South Pacific. The FESPIC was made into a flourishing organisation under his inspiring leadership, which enabled many in this large part of the world to benefit from the many-sided importance of sports as a hardly to be overrated part of their rehabilitation and further development. The creation of the 'Japan Sun Industries' - - which recently acquired its second seat in Japan - - has brought many people closer to a more complete way of existence, or as he liked to express it : 'to spend and enjoy full, happy life'.

Of course, to develop a point of view is not enough on its own. His capabilities as an organiser also guaranteed the realisation of his ideas. Everyone who knows what needs to be done to bring international events as 'The First International Abilympics' (Tokyo, 1981), 'The First International Meeting on Leisure, Recreation and Sports' (RESPO I - Gamagori-City, 1984) to a financially sound conclusion as well, will share my admiration for Yutaka. And to remember that during these events he would both have and take the time for personal contacts, making jokes in an easy and relaxed manner and-- as an 'ordinary' participant - - enjoying the community events.

Yutaka and Hiroko were going to spend the first week of August last at our home. We were looking forward to this 'holiday'. Uudoubtedly, it would also have been a period of intensive consultations - - for once not disturbed by the fuss of symposia and meetings - - about the future developments of rehabilitation in a broad sense. We would have talked a good deal about the second RESPO, of which he was so glad that this International Conference on Recreational Sports and Leisure would be held in Arnhem in 1986. He wrote to me about this on 10 May 1984, after the RESPO I : 'The letters of gratitude from abroad please me so much, but the most delightful present for me was your acceptance of the 2nd RESPO in 1986'
On the first of July we received a letter in which Yutaka wrote that due to his illness he was, unfortunately, unable to come to us. I will never forget the moment when, three weeks later, over the telephone came the message of his decease.

To conclude, two more things :

Anyone who has been so glad as I have been to be able to collaborate with him will agree with me that Yutaka Nakamura could never have realised what he did all by himself. Without the help of his wife Hiroko and without the help of his colleagues all this would not have been accomplished. But it was his great merit to have anticipated the developments, taking hold of the possibility to realise plans and inspiring others as well.

We should all look back with gratitude upon the abundance Yutaka has given us during his life. But there is more! And I sincerely hope that especially this - - together with all those good memories -- will be a comfort to Hiroko!

Yutaka Nakamura leaves us a clear message :
it is worth while to keep on working and fighting for the happiness of life of others who are so often so much worse off than we,
and that difficult matters will turn out not to be so hopeless through a joint approach of enthusiastic people.

Yutaka, our never ending thanks for all you have given us and are still giving.

My Great Friend, Dr. Nakamura

Dr. John M.F. Grnnt (Australia)
President
International Stoke Mandeville Games Federation

It was a great personal shock to hear of the death of Dr. Yutaka Nakamura on 23rd July 1984, during the VII World Wheelchair Games.
Dr. Nakamura was known to many Australians and those of us who knew him well have lost a valued friend and colleague. His place cannot be filled, so unique a person was he. I counted it a great privilege to have been associated with him, both as a surgeon and as a world leader in the care of the disabled. No other person has had such an influence in the Far East and Pacific area of the world, and few will ever be able to achieve a fraction of the success and worthwhile results that he did.

Trained as an orthopaedic surgeon, he practised in Oita on the South Island of Japan. Not only did he develop a surgical unit of world class but his vision of the value of work, and the provision of facilities such as the Japan Sun Industries, was really an indication of his genius. It was largely due to his interest and driving force that the Far East and South Pacific Games were established, and I believe these games will continue as a memorial to his work.

Not only did he work for the Far Eastern region but he served as a member of the Executive Committee of the International Stoke Mandeville Games Federation. I will miss his quiet influence and help and his great wisdom, on this committee.

Away from medicine and its side issues, he was a man of many and unusual interests. His home and family surrounds were a delight to experience. He was dedicated to his family who enjoyed with him his appreciation of music and culture. He was a collector of rare objects of antiquity and a visit to his country home with its old thatched roof, a national museum and his zoo, was an experience never to be forgotten.

His friends will mourn the death of this quiet dedicated person, and our sympathies extend to his family as we remember his great contribution.

My last memory of him was a happy one at an International Society Meeting in Stoke Mandeville in 1983. There he did not look well but it was obvious that even amongst friends he was carrying on with his usual indomitable spirit. It was with great regret that we learnt of his death. We can only be pleased that his death was a quiet, peaceful one and that he has been to his ancestors and to the life hereafter.

Japan Sun Industries and the Organisation of Paraplegia of Oita have lost a personal friend, Japan has lost a great pioneer, the Far Eastern area of the world has lost one of the great doctors of the last two decades and the International area of paraplegia has lost a great worker and one whose memory will live on.

Our greetings go to his wife and family at this time. We will remember, as time goes on, his achievements which will be much more meritorious than they seem at the moment for his work will multiply not just within Japan, but in most parts of Asia.

My Recollections of Yutaka Nakamura

Dr. the Hon. Harry S.Y. Fang (Hong Kong)
Past President
Rehabilitation International

Yutaka Nakamura was an international man of great vision, a dedicated pioneer and warrior in the plight of rightful needs for disabled people all over the world.

I first came to know him when he attended the 4th Pan Pacific Conference held in Hong Kong in 1968. He was an experienced orthopaedic surgeon with a particular interest in spinal cord injuries. I remember Sir Ludwig Guttman, the father of paraplegic management, telling me when he visited Hong Kong in the early seventies that Dr. Nakamura spent sometime with him at Stoke Mandeville, and out of the long list of people who worked with him, Nakamura and George Bedbrook were the most outstanding in the field. How right he was: Sir George was honoured with a knighthood for his great achievement in Australia and the establishment of the Skenton Park Paraglegia Centre. Nakamura on the other hand developed the world renowned Sun Industries beginning with a handful of paraplegic patients and a small clinic and workshop. These two centres have now became Meccas in the field of Rehabilitation.

Dr. Nakamura fought hard for the recognition of the disabled in his country and changed the attitudes of the business community and public at large to keep them in gainful employment. His motto "The disabled need a chance not pity". He established a unique township for wheelchaired persons in Beppu in the prefecture of Oita and in recent years a second Sun Industries in Gamagori and a 3rd is in the pipeline. It was his ambition to set up the Sun Industry type of institutions overseas, in Hong Kong, Nepal. China and throughout the Asian and Pacific region.

He was also convinced that recreation and sports activities for the wellbeing of a person are just as essential for the disabled as for the able-bodied. He was the prime mover in founding the Japanese national games for the disabled, the Oita Wheelchair Marathon which is now of international fame, the FESPIC games (Fareast and South Pacific Games) and the latest venture of International Event on Leisure, Recreation and Sports-RESPO just before his death. All of these have made a tremendous impact on the lives of the disabled people both in his own community and the rest of the world.

Abilympics, an international competition of skills and abilities amongst disabled persons, is another important innovation that Dr. Nakamura conceived and successfully launched from Japan. The next Abilympics will be held in Bogota, Colombia in 1985 when he will be greatly missed.

In the world of rehabilitation and especially in Rehabilitation International, the world's largest non-govenmental organization working with the disabled, Dr. Nakamura served with dedication and distinction as its Vice-chairman for Asia and the Pacific, and the Founding Chairman of its World Commission on Leisure Sports and Recreation.

The last international commitment he fulfilled overseas before his death, when he was conscious of his failing health, was on the occasion of the presentation of the Charter for the 80's by me as President of Rehabilitation International to the Prime Misister of China on 14th April 1984, when he came as a member of the delegation. It was one of his life time ambition to visit China and to help in some way, this big nation with its one thousand million people, in dealing with its disabled citizens. Indeed, he wasted no time. While we were there, he invited China to send a team of disabled sportsmen to visit Japan later that month and also promised to seek the donation of 66 sports wheelchairs from the Japanese people for China. This he did and this was what started off wheelchair sports in China. In October this year, at the first Chinese National Games for the disabled in Hupei, Anhui, I was there to witness the first wheelchair basketball played in China.

To me, (and I think I can speak for the International Rehabilitation Community) Yutaka Nakamura is a legend, one whose heart and soul were given to the cause of disabled people throughout the world, and whose monumental contribution to mankind will for long be dearly remembered.

In Memoriam -- Yutaka Nakamura

Dr. Arie Klapwijk (The Netherlands)
Founder
HET DORP

When I received the telegram containing an invitation to collaborate in the publication of a booklet: 'In memoriam Yutaka Nakamura', I naturally promised to co-operate. Imagine I would not!

Yet I felt it was a difficult task. Difficult, because Yutaka Nakamura died only such a short while ago and difficult because ever since he died on the 23rd of July 1984, very few days have passed without my wife and I talking about him or telling other people about him. You may certainly call this exceptional.

But then Yutaka Nakamura was an exceptional person. Exceptional, perhaps especially because of his versatility.

Our relationship developed as follows. After having visited 'HET DORP' (a part of the city of Arnhem adapted for 400 severely disabled people) on a Sunday in 1975 -- when I was not in The Netherlands -- Yutaka Nakamura wrote to me asking me to advise him in developing the care for the disabled in Japan, and invited me for a lecture-tour in his country. After a detailed correspondence concerning my visit to Japan I met Yutaka for the first time on 17 May 1977 in Beppu-City. The start of a year-long intensive collaboration. My lecture-tour had been planned for Beppu-City, Okayama, Kyoto and Tokyo.

Having arrived in our hotel in Okayama we agreed to have breakfast together with Yutaka at 8.15 am. The following occurrence is one which I have often told to my colleagues of the Johannastichting as an example of hospitality and kindness.

A Great Pioneer Passes On

Sir George M. Bedbrook (Australia)
Senior Spinal Surgeon
Spinal Unit
Royal Perth (Rehabilitation) Hospital

I first met Dr. Yutaka Nakamura M.D. at the International Stoke Mandeville Games which were held in the year of 1964 in Tokyo. These games were held immediately after the Olympic Games and Sports for the Disabled. I was immediately impressed with the vigorous, active orthopaedic surgeon who in 1961 pioneered the first trial in Japan for the Sports for the Disabled in Oita City. This quickly spread throughout Japan from this modest beginning in Dr Nakamura's home town and from there to the Stoke Mandeville Games involvement. I immediately started a correspondence with him which was to last some twenty years ; a correspondence which was full of information as we bacame firm friends in an area where we were both trying to serve the disabled paraplegic.

He spent a period of time with Sir Ludwig Guttman in the early 1940's. This interested him further so that when he returned to Japan he not only looked at the general care of paraplegics in the City of Oita but he also looked towards the vocational activity for these people. During that time he was elected to the International Stoke Mandeville Games Executive as the Japanese representative and was partly responsible for the regular attendance of a Japanese team to Stoke Mandeville in the forthcoming years. There is no question that his example of better medical care, better vocational care and better social care impressed the Japanese Government very greatly indeed. It was in the years between 1964 to 1970 that the Japanese Government moved quickly into establishing some very fine paraplegic services throughout Japan.

In 1966-1967 I learnt of his efforts in the Japan Sun Industries which he had commenced in 1965 with only seven disabled workers. This was interesting for it was in 1957-1958 that the Paraplegic Association of Western Australia started their industries, again with just a hand full of people. How big things grow from very small beginnings.

He visited Australia in the early 1970's and passed through Perth on at least a couple of occasions when we were able to discuss many of the problems associated with paraplegia and tetraplegia.

Sun Industries and his orthopaedic hospital grew very rapidly under the vigorous management that he had to offer. He seemed to be here, there, and everywhere. Visitors to his area were always well looked after and all came back very impressed with his work. It will be one of my great regrets in life that I did not visit the Japan Sun Industries whilst he was there, but I have taken the opportunity of reading all he wrote about the Sun Industries, of looking at the plans, and watching the development of this magnificent vocational activity which must be an example, not just for Japan, but for all of the world.

He joined the International Medical Society of Paraplegia soon after the mid 1960's. A year before his death he resigned as Vice President. He had served the Society faithfully and well over a long period of time. During the period of his Vice-Presidency, and when the society was actively, in the late seventies early eighties, thinking of the responsibilities of Vice President, he made himself very familiar with the activities for paraplegia in many parts of the world. For instance, he investigated the status of the paraplegic activities in Korea when as late as 1982 he was communicating regularly with the Professor and Chairman of the Department of Orthopaedic Surgery, Professor Myung Sang Moon of the Department of Orthopaedic Surgery, St Mary's Hospital, Catholic Medical College and Centre in Korea.

He then extended his interests into China via Hong Kong and was able to give to the International Society an excellent report on the management of paraplegia and tetraplegia in those countries where up till the present time there has not been any major comprehensive services.

Recently, in late 1983, he had another visit to China when he was able to make donations to various hospitals from the point of view of managing paraplegia more actively.

His interests were wide and varied. In the early 1970's he was the founder of the Far East and South Pacific Games for Paraplegics (FESPIC) and the FESPIC organisations remained one of his major interests right up until the time of his death. As Chairman of the Executive Committee and under his guidance, the initial founders met on a number of occasions both in Australia and in Singapore. I remember attending these meetings and finding him enthusiastic. FESPIC Games Series are now a vigorous series of well-established games for paraplegics in which most of the countries of that region take an active part, all largely because of the initial endeavour and vigor of this extraordinary man.

He remained a member of the International Stoke Mandeville Games Executive Committee for many years and then retired in favour of a colleague so that he could have more time in Asia to investigate and help in the formation of paraplegic services. He had a great deal to do with the formation of a Japanese Medical Society of Paraplegia in 1966 when the first scientific meeting took place in Beppu. Just before his death he wrote to me about this great interest indicating how important this was. The Society grew to over 700 members. Dr. Nakamura was responsible for extending the work of the International Medical Society in Japan with assistance being given to ultimately publishing the Journal of Paraplegia in Japanese and with helping the clerical and secretarial responsibilities of the members in the Japanese Society.

He was actively related to other scientific societies in areas such as orthopaedics, neurosurgery and urology, all of which must be missing the friendship and guidance of this man who played such a very large part towards the more adequate management of paraplegia in Japan as well as in other countries of the far east.

He pioneered the Abylympics, a competitive international competition for vocational activity. He pioneered the International Meetings on Leisure, Recreation and Sports for the Disabled, and thus has a reputation. People will have a memory of him for many, many years to come.

Many paraplegics and tetraplegics in Japan owe very much to this extraordinary man who in just twenty years undertook so much and achieved so much. It has been said that true immortality is given to those whose disciples multiply and whose works increase over a long period of time after their death. There is no question that this will happen to the work of Yutaka Nakamura.

The final accolade given to Dr. Yutaka Nakamura was the silver medal of the International Society of Paraplegia. As the President of the International Medical Society of Paraplegia it was to have been my great privilege and pleasure to present this to him late in 1984 but he was unable to attend the International Meeting in Denver, Colorado. The presentation of the medal was by the unanimous decision of the Council. Here was a man whose outstanding achievements in the area of paraplegia had earned the merit of this overwhelming International Award. Through the courtesy of the Japanese Consul in Australia this medal has now been presented with due ceremony to his widow so that it can be placed on the altar of memory to this outstanding man.

Friends will not forget him. He will live on in the memory of so many people throughout the world and particularly in the world of Asia where he served so many, so valiantly, over a long period of time.

His name is well remembered in most of the centres in Australia which he kept in contact with, where he knew the medical staff, and where he had so many friends.

語る

（太陽の家従業員）

杉尾　良一

太陽の家を四十年に設立され、身障者のスポーツに、仕事に、生活にそして生きがいにと色んな面で私達の為に尽くして下さった中村先生が、七月二十三日急逝してしまわれました。

中村先生が急逝されてしまわれた事により、私達身障者にとって大変な痛手である事は勿論、これからの福祉面においても大変な損失だと思います。

私が、太陽の家を知ったのは、昭和四十五年の一月まだ病院での入院生活中のことでした。交通事故による脊髄損傷という、一生回復する見込みのない、又一生車椅子での生活をしなければならない身体で、この先どんなふうに生きて行けば良いのだろうか、又車椅子での仕事があるのだろうか、仕事が出来るのだろうかと思い悩んでいた時、病院の看護婦から、別府の太陽の家と云う所ではいろんな障害を持った人達が、健常者に負けないくらいの仕事をしていると話を聞き、私も仕事をするならここだと思い太陽の家へ入所させてもらいました。

そしてここで初めて、この太陽の家を設立されたのが中村先生である事を知りました。始めの内は中村先生は理事長であると云う事で、私にとってはとても遠くの人のように思え、話をする事は勿論顔をまともに見ることも出来ないような存在の人のように思っていました。所がこの遠い存在のような人が、昭和四十七年の鹿児島国体に車椅子バスケットボールの一員として参加した時、私達の宿舎に差し入れを持って来て下さり、部員一人一人に「どうだ疲れていないか、マッサージをしてやろうか」と、まるで中村先生も私達と一緒に生活をしているように、部員一人一人をいたわり、励まして下さった態度を見て始めて私自身の今までの中村先生は理事長だから遠い存在の人だ近よりがたい人なんだという思いを一新する事となりました。この時から私の考えは、本当に身障者の身になって太陽の家を運営されているんだと云う事がはっきり感じとれ、それからというものこの太陽の家で働く事に生きがいを感じるとともに、誇りをもって働いて来ました。太陽の家がここまで大きくなったのは、私が鹿児島で「私達と生活をともにしているようだ」と思ったのは間違いで、本当に私達と生活をともにしておられ、身障者のことを心底から考え実行に移して下さったからだと思います。その中村先生の亡くなられた今、今まで中村先生の私達障害者の為にして下さったことを継承するとともに、発展させるべく努力して行きたいと思います。

沖津　一男

昭和四十一年六月、梅雨の晴れ間をみて三輪バイクで北九州から太陽の家を訪れました。仲間が十名ほど笑顔で迎えてくれた。車イスのSS青年、松葉杖のWOさん、肉親のように親切にしてもらった。ここで働ける、仕事が出来る、三十才になったばかりの自分が、子供の様にはしゃいだ事を今でも覚えている。

中村先生との出会いは、それから一ヵ月ほどして昼食の時「おい飯はうまいか、体に気をつけろよ」まだ多毛だった頭を軽くたたかれた。もう何年も前からの知り合いの様な親しみを感じた。その頃、サクラにイカリの食器は国立病院から、米は中村病院から、味噌、しょう油、魚、野菜はどこからかの商店からつけ買いだった事を、後日中村先生より一足先に逝ってしまった竹工科並松おやじさんから聞いて、のどがつまる思いがしました。

扇風機もない蚊の多いレンコン畑では蛙がゲロゲロ、むし暑く寝苦しい夜、仲間四人で割勘で酒を飲んでいた。突然中村先生が見えた。「コラ、何を飲んでいるか、お前達は酒を飲んでのんびり出来る時か」一喝、みんなしょげかえった。まだ五合は残っていた酒を捨ててしまった。これも後で聞いた話だが、先生は何故あの時、一人位酒ぐらい飲ませて下さいと抗議しなかったのか、それが残念だったと言われたそうである。きっと心の中では酒よりも冷いビールを、つまみにはピーナッツでもと思われたに違いありません。

それからしばらくして、国立病院の車イスを使っている人は、すぐ返却する様にと連絡があった。「この病院の車イス誰が持って来たの」？。さあ困った。車イスがなければどうなる。先生に誰か相談に行ったところ、ニコニコ笑ってノーコメントだったそうである。その後車イスを返したという話は聞いていない。

四十二年二月、悪寒発熱、三十九度。どうする事も出来ない。国立病院整形外科受診、運よく畑田先生外来日、右大転子発赤、速入院、それから中村先生、畑田先生主治医で治療を受ける事一年余り。十月の医長回診の日「おい中々良くならんな」「先生切ったらどれくらいで良くなりますか」「一ヵ月もすれば良いだろう」「早く完治したいと思います」「思いきって切るか」「退院したいと思います」「よし婦長来週手術」切るたって右大腿離断。それから十日後、三十一年間苦楽を共にした右脚とお別れした。抜糸も出来ない数日後、看護婦さんがアンコの一杯入ったヤキタテの田舎もちを持って来て「今記録室でヤイタの、医長からの差し入れよ」大病院の医長が一患者に差し入れなんて聞いた事がない。昔祖母から、もちは三年の古キズをよびもどすと教えられた事を思い出したが、そんな事は気にしなかった。うまかった、おいしかった。

四十三年早春、やっとの思いで退院した。書類上は再入所となっていたが、元の職場、元の待遇で復帰出来たのも不思議だった。

そんなある日曜日、玄関前に二人乗りのホンダスポーツ八〇〇が駐車していた。子供の頃から何事も興味深々だった自分の事、運転席をのぞき込んでいると後方から突然「コラ」中村先生の笑顔があった。完全燃焼した排気煙、軽いエンジン音、すべる様に走っていった。最近のように多人数になって、めったにお会いする事もありませんでしたが、医師と患者として個人的にも良くお話し出来た先生はもういない、もう一度帰って来て欲しいと思います。

西岡　潤

今は取り壊された旧管理棟に事務所があった頃の事です。ある午後、先生のおられる時、焼芋屋が道を通り「おれが芋をおごってやろう」(先生は庶民的なものがお好きでした)渡辺課長(当時)がハイッとばかり飛び出され、私たちは美味しい焼芋をよばれたのです。しかしその後渡辺課長は「おれはあの時の芋代をまだ貰ってない」と折りにふれてボヤかれ、私たちはその度に大笑いしたものです。

昭和五十年、十周年記念行事で、私が永年勤続賞を受けた時、先生がこられ「おれは太陽のなかった時から働きよるぞ、表彰して貰いたい」などとおっしゃるもので、囲りの人達とナルホドと笑いました。思えば私達の方から特に先生を顕彰してさしあげる事もないまま先生は逝ってしまわれたのです。

江藤　秀信

十八年前太陽の家に入所し、中村先生と知り合えた事は、スポーツ好きの私にとって大きな励みとなりました。国際大会には三度参加しましたが、うち二度は先生と一緒に参加する事が出来ました。

大会中先生は選手達に細かい心使いを忘れず、いつも笑顔で接しておられました。そして私達一人ひとりに「おい、大丈夫か」とか「体の調子は良いか」等声をかけて激励して下さいました。また、外国の食事に慣れない選手をみると、どこからか米を調達して下さったり、その他色々な援助をして頂きました。そんな先生のやさしさと思いやりには、選手達誰もが感激しました。大変親しみやすい面とスポーツに対する厳しい面を持っておられた先生は誰からも尊敬されていました。日本チームが苦戦すると、負けず嫌いの先生は必死になって応援していました。また勝った時は両手を挙げてバンザイをし、体一杯で嬉しさを表現し選手達一人ひとりと握手をされ、健闘を称えられていました。そんな先生の姿は今でも脳裏に焼きついております。

身障スポーツを始め、その他数えきれない功績を残された中村先生が永遠に遠い人になってしまった事は、本当に残念で残念でしかたありません。今後も中村先生の遺志を継ぎ、太陽の家、そして身障者のスポーツの発展を目指すと共に、太陽の仲間が力を合せて国内大会、さらには国際大会で頑張ろうではありませんか。

(サンスポーツ3号より)

大分県で全国初の身障者スポーツ大会を開く(S.36)

伊方　博義

それは昭和四十年の年の瀬もせまったある日の事でした。厨房の醤油が一升ビンの底に少し残っているだけでした。中村先生は「俺のところに取りに行け」とおっしゃいました。当時先生は亀川平田に住まわれていました。玄関のベルを押す事も出来ず、お手伝いさんにそろっと醤油を分けてもらいました。その前の日もてんぷら油を分けてもらったばかりなのです。とにかく何もないところから出発した太陽の家でした。仕事をしたいという情熱に燃えた目だけがギラギラしておりました。今も旧海軍のイカリのマークのついたドンブリは、そんな太陽の家創立時を象徴するかのように残っております。

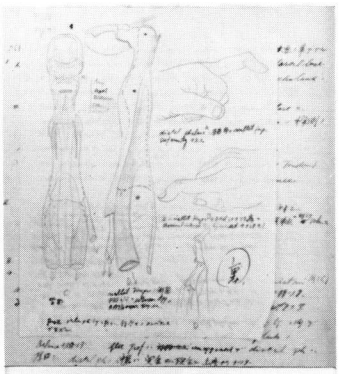
最近の先生は、「どうかね、仕事はうまくいっとるかね」が口癖でした。続いて出てくる言葉が、「重度の人の仕事はどれだけ増えたかね」でした。『障害を持つ人がやる仕事は決して赤字ではならない。しかしもうけようとして重度の障害を持つ人の仕事をなくしてはならない』このようなお考えを残して先生は逝ってしまわれました。

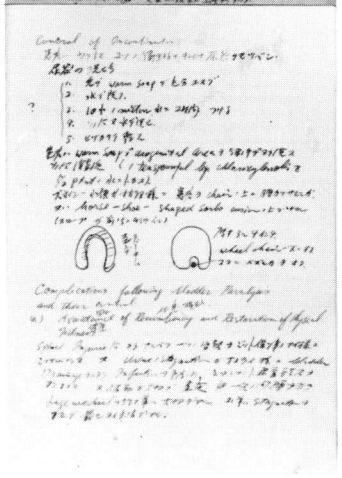
常に気を細やかにつかわれた先生、てれくさがり屋の先生、スイカと焼きイモとまんじゅうの好きだった先生、大分弁丸出しで口角に泡をつくって熱弁する先生、先生のおっしゃる事があまりにも難題で泣く思いをした事も何度もありました。しかし目標を失いかけた時、先生のとらえどころのないスケールの大きい話を聞くうち、不思議と仕事へのファイトが湧いてきたものでした。しかし、今はもうそんな勇気をつけて下さる事が出来なくなりました。これから先、先生は何をなさろうとお考えでしたか？　私共に何をしろとおっしゃりたいのでしたか？　私共はご指示を戴けないのが残念です。今まで先生の残されたいろんな事を、畑田先生を中心に、多くの仲間達とじっくり見直し、先生のご遺志を大切に育ててゆきたいと思います。多くの仲間達ともっと素晴らしい太陽の家にして参ります。イヤ、太陽の家だけでなく障害を持った仲間達が、障害を感じない世の中を作り上げる為に努力してゆく事を先生にお誓いします。

先生より一足先に天国へ逝った高崎さん、橘さん、沼田さんら創設に力を出し合った仲間の人々と共に私共をお見守り下さい。おやすみなさい。中村先生、安らかに、安らかにおやすみ下さい。

想い出

昭和２年３月31日、中村亀市氏の二男として生まれる。代々医師の家系であり、兄弟と共に医学の道を志ざす。
研究心、好奇心は人の倍以上。型にはまることが嫌いだった。





昭和34年３月８日に結婚。「〝中村旅館〟と呼ばれるほど来客の多い毎日でした。」　（広子夫人）

「昭和35年に初の海外留学に出発し、以後、子供の生まれる頃には海外に行って留守でした。」
（広子夫人）

「忙しい毎日でしたが、１時間でも、30分でも時間をみつけては子供を連れてドライブしていました。」　（広子夫人）

子供をみつけると、どこでも話しかけた。
オーストラリアの第2回フェスピック大会で

（好きなことば）
「釣して綱せず」

（好きな歌）
フランクシナトラ「想い出のサンフランシスコ」
菅原洋一「知りたくないの」

（好きな俳優）
山本陽子・池内淳子

（免許）
自動車の免許は大型、けん引、2種など全て。アマチュア無線、小型船舶操縦免許4級等

（趣味）
旅行、登山、園芸、読書、写真、民芸品収集など。

「破れまんじゅうなど素朴なまんじゅうが好きで、朝から一人で食べる程でした」
（広子夫人）

「小さい頃、おもちゃのジープが欲しいと言ったら本物のジープを購入して、良くドライブに連れて行ってくれました」（長男　太郎氏）

グットマン博士夫妻と中村先生夫妻

ネパールをはじめ、発展途上国への支援には並々ならぬものが

ポーランドのワイス博士と

忘年会で床に座り込んで飲み、食べる。

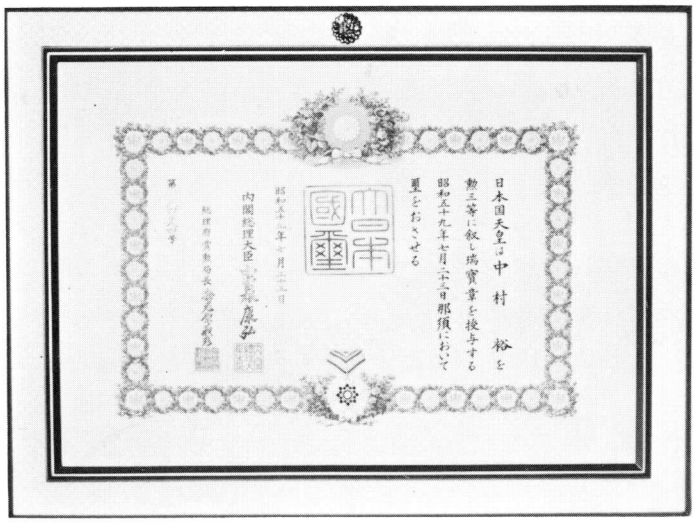
職員旅行で〝旅姿三人男〟を歌う

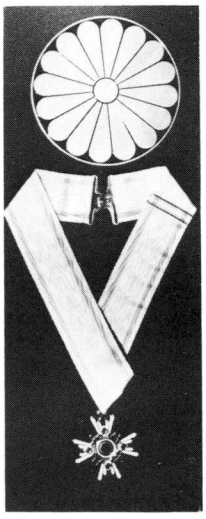
正五位勲三等瑞宝章に叙される

中村裕先生は、まず恩師九州大学名誉教授天児民和先生のご指導のもと、当時たぶんに未開の分野であった身体障害者のリハビリテーション研究の道を歩まれ、そのことが更に、英国留学時の恩師ルードヴィッヒ・グットマン卿の教えによって、脊髄損傷の研究、身体障害者スポーツの振興ひいては、身障者の社会復帰促進の道へとつながりました。

先生は、東京パラリンピックの選手団長、作家水上勉氏との出会い、そして別府整肢園々長としての数々の経験から、身障者に必要なのは、〝保護より機会を！〟〝同情よりもサイエンスを〟であり〝身心に障害はあっても仕事に障害はあり得ない〟との信念を持つに至り、その実現を図って太陽の家を建設されました。

中村　裕
正五位に叙する
昭和五十九年七月二十三日
内閣総理大臣中曽根康弘宣


日本国天皇は中村　裕を
勲三等に叙し瑞宝章を授与する
昭和五十九年七月二十七日那須において
璽をおさせる
昭和五十九年七月二十七日
内閣総理大臣



太陽の家では、先生のバイタリティーと先見性指導性によって、手仕事からライン作業、更にはコンピューターへと労働内容が変ると共に、身障者の自立を目指して、結婚、育児、脱施設化、社会融合などが促進され、このため日常生活動作の確立、環境の改善、職能開発を重視し、種々の研究開発事業が行なわれました。

これに関連して

一、国際障害者年に実施された国際身体障害者技能競技大会の実施を主唱

二、大分県当局に対して福祉の街づくりプランを提唱されました。

又、先生のライフワークである身障者スポーツ振興については、大分県身体障害者体育協会、日本身体障害者スポーツ協会の設立に参画。更に国内の各種身障者体育大会の他

一、東京パラリンピック（昭和39年）

二、第一回極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会（昭和50年）

三、第一回大分国際車椅子マラソン大会（昭和56年）

等を成功に導く原動力となられました。

他方、国際障害者リハビリテーション協会の専門委員長として、本年度第一回国際レジャー・レクリエーション・スポーツ大会を愛知県に誘致されたことは周知の事実です。

これら国際的な活動に付随して、フェスピック基金を設立し、発展途上国の方々に、リハビリテーションや身障スポーツを通じて、多大の援助が行われました。

最後に医師としての中村先生は、二つの大病院を経営し、特に脊損者の褥創治療、予防に力をそそがれ、リハビリテーション、パラプレジア両医学会に数々の研究成果を発表されています。

これらの、他に追随をみない先生の多彩な活動と、オピニオン・リーダーとしての役割を評価され、逝去にあたって天皇陛下より「正五位、勲三等瑞宝章」が授与されました。

受賞の数々

40・11・1　福祉新聞社、日本の社会事業を推進するこの一〇〇人賞

44・11・24　社会福祉法人日本肢体不自由児協会、高木奨励賞

47・11・3　太陽の家を創設し又身体障害者対策に新しい局面を開いたことに対し別府市長より表彰

50・4・11　社会福祉法人太陽の家を建設し身体障害者スポーツの振興につとめ身体障害者の社会復帰に貢献した功績により吉川英治文化賞

50・11・3　スポーツ療法の導入や太陽の家事業を通じて身障者の機能回復と社会復帰に永年力を尽くし、第一回極東・南太平洋身障者スポーツ大会を成功させたことにより大分合同新聞文化賞

55・11・3　身障者の自立更生と身障者スポーツの振興に寄与した功績に対して西日本文化賞

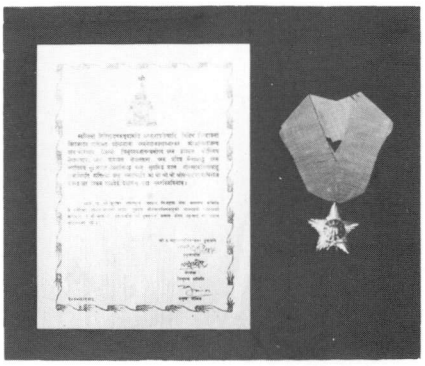
56・5・26　障害者福祉功労者として厚生大臣表彰

56・9・29　毎日社会福祉顕彰

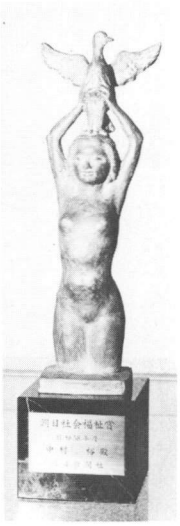
56・11・3　大分県知事より更生援護功労者表彰

56・12・9　内閣総理大臣より国際障害者年記念功労者表彰

58・12・29　身障者援助に功績があったことに対しネパール国王よりスパラバル・グルカ・ダクシン・バフ勲章



59・1・27　朝日社会福祉賞

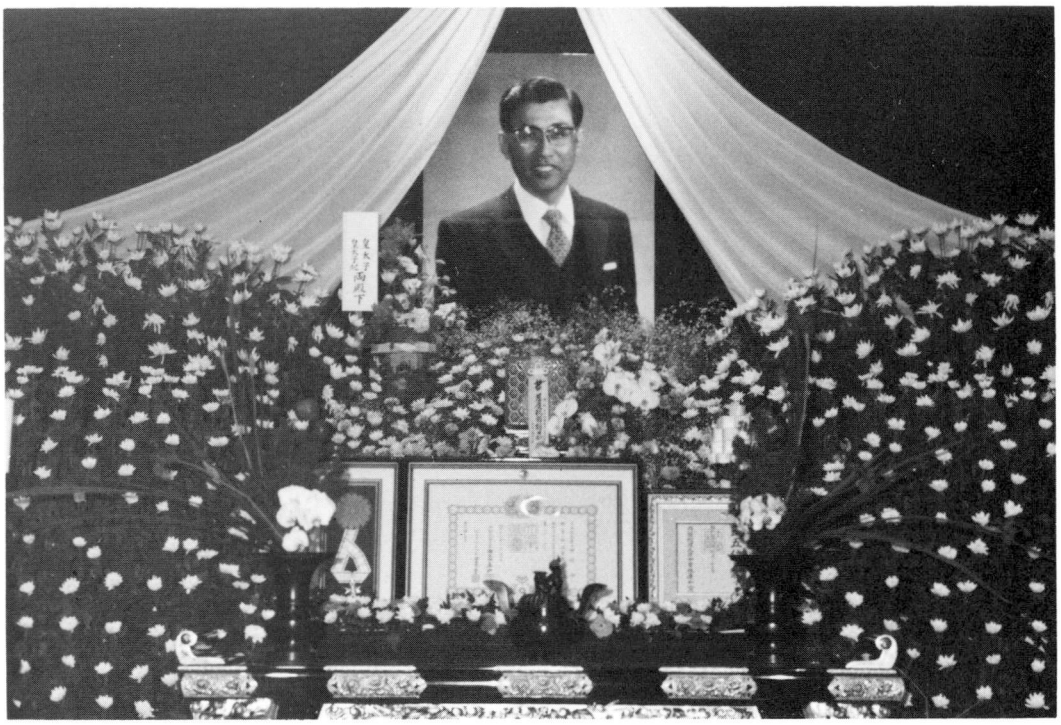


59・6・20　国際パラプレジア医学会より一九八四年シルバー・メダル

59・7・23　正五位勲三等瑞宝章

合同葬、しめやかに執り行なわれる

太陽の家
大分中村病院
中村家



中村先生の葬儀・告別式は二十八日午後一時から、社会福祉法人太陽の家、医療法人恵愛会大分中村病院、中村家の合同葬として、別府中央葬儀社中央会館においてしめやかに執り行なわれました。

葬儀に先だち叙位叙勲の伝達が行なわれ、ご遺族によって正五位勲三等瑞宝章の勲記と勲章が祭壇に飾られました。

太陽の家讃歌が流れる中、白菊で埋まったご遺骨ご遺影の前に、大分中村病院、太陽の家従業員代表により献灯献花がなされました。

つづいて井深大葬儀委員長により皇太子殿下妃殿下のお言葉が紹介されました。

導師ご入場、読経がはじまり、参列者は悲しみもあらたに合掌致しました。

弔辞は渡部厚生大臣(社会局長代読)、平松大分県知事、杉岡九州大学医学部教授、葛西日本身体障害者スポーツ協会会長、吉川大分県医師会会長、秋山ちえ子女史、太陽の家従業員代表吉松氏、友人代表吉村氏によってそれぞれ述べられました。

また、常盤宮殿下、中曽根総理大臣、リハビリテーション・インターナショナル会長ハリーファン氏をはじめ国内外から三、四一二通の弔電が届きその一部が拝読され先生の生前の国際的活動功績と遺徳がしのばれました。

読経の中ご参列のお一人お一人から焼香があげられ先生のご冥福をお祈りし最後のお別れをしました。

この葬儀にはご親族、官界、政界、医学界、福祉、身障者スポーツ関係、病院、太陽の家提携企業の会長・社長・役員の方々、大分中村病院、太陽の家従業員など故人ゆかりの方々が参列、その人数は三〇〇〇人を記録しました。

▲多くの参列の方々が…

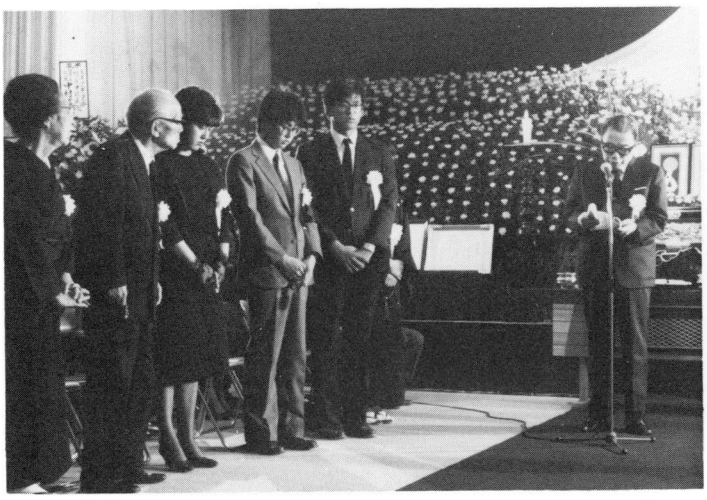
▲太陽の家従業員による献花

皇太子殿下皇太子妃殿下のお言葉

このたびは大変なことでおきのどくです
先生は長年にわたって
身体障害者のためにご尽力下さって
まだまだお若いのに
大変おしい方をなくされて残念です

▲皇太子殿下、妃殿下供花

▲皇太子殿下、妃殿下をご案内されるありし日の中村先生
（昭和50年 第1回フェスピック・大分市営陸上競技場にて）



▲会葬御礼の挨拶をされる実兄信博氏

▲先生の御両親ご焼香

葬儀委員長挨拶

太陽の家会長

井深　大

ただいまここで大分中村病院、太陽の家の創設者である中村先生のご葬儀をしなければならないということは、ここにお集まりの皆様だけでなしに、世界中の皆様方がどれだけ力を落としているかと思うと、ほんとうに残念でなりません。

中村先生のほんとうの価値を知り、高く評価して今日ほんとうに残念に思っているのは、世界中の身体障害者の方々ではないかと、私は感じております。障害者というものが何かしら庇護をうけるものだという今までの考え方をまるっきり変えられたのが、中村先生の偉大なところではないかと思います。

本日は正五位勲三等というようなたいへんな栄誉を得られましたけれども、中村先生はこの栄誉にもっともっと倍する非常な大きな働きを人類に与えて下さった方だと、私は信じております。この偉大な中村先生を今失い、ここにお送りをしなければならないということは、ここへお集りの皆さんと深く胸に刻んで悲しみを共にするところでございます。

中村先生は単に中村病院の院長先生、あるいは太陽の家の理事長、創設者というだけではなしに、ほんとうに障害者、あるいはもっと大きくいえば福祉というものの考え方を切り変えて下さった方。

これからこの切り変えた実践運動が、別府の太陽の家に続いて、どんどん拡がっていかなくてはならないこの時に、まだ若い先生が倒れられた。このような福祉の仕事のために殉じられた先生のご葬儀がここに営まれることは、先生の代わりになってお集まりの皆様方が、これを守っていくという決心をして頂くまたとない機会ではないかと、そういうことを中村先生は笑顔をうかべながら皆さんにお願いして逝かれたと思うのでございます。先生のお人柄、先生のご功績については、ついでいろいろな方から追悼の辞の中で述べて頂くと思いますので、私は省略しておきます。

今日暑い中、皆様方に一生懸命ご会葬いただきました。まことにありがとうございます。私からはいろいろなことはつけくわえません。申し上げたいことは山ほどございますが、このお葬式の始まりにあたりまして、ひとことご挨拶申し上げました。ありがとうございました。

弔辞

厚生大臣

渡部　恒三

謹んで、正五位勲三等　故中村裕先生の霊に申し上げます。

あなたは、身体障害者のリハビリテーション病院経営のかたわら、社会福祉法人「太陽の家」理事長をはじめ、財団法人身体障害者スポーツ協会役員をつとめられるなど、身体障害者の福祉とスポーツの分野における第一人者として、御活躍をされておられましたが、不幸にして病の冒すところとなり、療養の甲斐もなく七月二十三日不帰の客となられました。

この霊前に立ち深い悲しみを禁ずることができません。

あなたは、昭和三十三年国立別府病院整形外科医長として奉職されて以来、二十有余年に亘りその卓越した先見性と決断力をもってわが国身体障害者福祉の向上のため心血を注ぎ、その発展充実に尽力されたのであります。生前におけるあなたの御業績をかえりみますとき、先ず脳裡に浮かんで参りますのは、身体障害者のスポーツ振興に対する情熱であります。あなたと身体障害者スポーツの結びつきは、その発祥の地、英国ストークマンデビル病院だったと聞き及んでおります。ここで脊髄損傷者のスポーツへの取り組みを学び、これをいち早くわが国に取り入れ、その普及に尽力され昭和三十九年に開催されました「東京パラリンピック」を成功裡に終えることができたのも、あなたの御努力に負うところ大であると伺っております。

またあなたは、その後、財団法人日本身体障害者スポーツ協会の設立に参画され、役員として今日の身体障害者のスポーツの発展に大きく寄与されるとともに、昭和五十一年には「第一回極東・南太平洋身体障害者スポーツ大会」、昭和五十六年には「第一回大分国際車椅子マラソン大会」の開催を手がけられ、さらに本年四月、あなたの御尽力で開かれた愛知県での「第一回国際障害者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会」が、内外からの多大の評価をうけたことは記憶に新しいところであります。

このようにあなたの身体障害者スポーツに傾けられた情熱は、身体障害者に勇気と希望を与え、また、その御業績は「身体障害者スポーツの生みの親」として後世に語り継がれるものと思います。時あたかも、パラリンピックの年、思い出の地、英国ストークマンデビル競技場でちょうど「第七回車椅子競技大会」が開催されているのも何かの因縁との感を禁じ得ません。

あなたはまた「身障者にとって大切なのは、保護することではなく、自活する機会を与えることである。」との信念の下に、身体障害者の福祉施設の設立を決意され、その実現に奔走され、昭和四十一年に社会福祉法人「太陽の家」を設立されました。

代読される厚生省社会局長　持永和見氏

とくに、身体障害者の能力開発や就労のための福祉工場の設置には並々ならぬ情熱を注がれ、わが国最初の試みとして、昭和四十七年これに取り組まれたのであります。

爾来、今日まで、あなたが創設された身体障害者の福祉工場は、いくたの先駆的な試みを実践し、現在では総勢四〇〇人を超える障害者を擁し、「孤立した施設」から「地域に開かれた職場づくり」を目指した施設の経営は、今後の身体障害者福祉施設のあり方を指向するものとして高く評価されています。

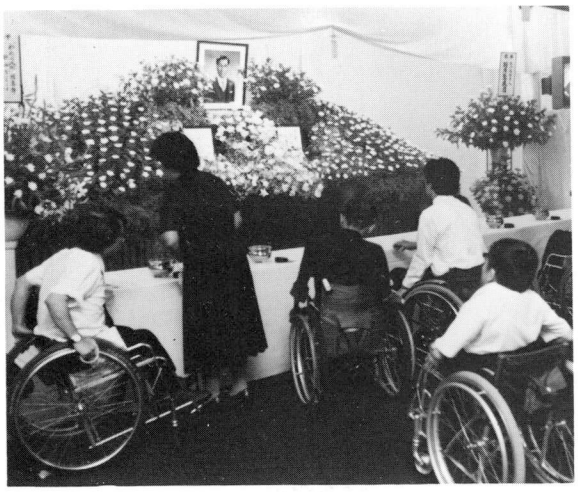
このようにあなたは、医師としての専門的技術に裏打ちされたヒューマニズムとフロンティア精神をもって身体障害者の福祉の各分野において先駆的・指導的活動を続けられ、その幾多の御功績は枚挙にいとまがありません。

わが国の身体障害者の福祉対策は、あなたを初め関係者の努力により、年々その充実をみているところでありますが、残された問題も少なくありません。

このようなとき、あなたのようなかけがえのない指導者を失いますことは斯界はもとより、厚生行政にとりましても大きな損失であり、私共関係者一同痛恨の極みであります。

今後は、あなたの残された数々の御業績を踏まえ、身体障害者の福祉をさらに発展させることを誓うものであります。

最後に、あなたの在りし日の温容を偲びつつ御冥福を御祈り申し上げ、私の弔辞といたします。



大分県知事

平松　守彦

つつしんで故中村先生のご霊前に告別の辞を申し上げます。

先生ご逝去の悲報を沖縄へゆく「少年の船」の船中で聞き、突然のことで驚愕しました。日頃から病院経営と身体障害者福祉事業に全身全霊を打ち込まれていた先生は、あたかも死を急ぐかのごとく、ご家族始め多くの人々の哀惜の中に忽然としてこの世を去られたのであります。誠に痛恨の極みであります。

先生は、昭和四十年「障害者には保護より機会」をモットーに、全国でも初めての身体障害者が働く福祉施設「太陽の家」を創立されました。

今日では、ソニーをはじめ立石電機、本田技研、三菱商事等、一流会社の協力を得て、電子機器や情報処理など、先端技術産業を授産作業に導入し、一方ではスーパーマーケットの経営やコミュニティセンターを施設内に建設されるなど文字どおり世界の身体障害者の方々の「太陽の家」として、その名をはせるに到りました。

また、先生は身体障害者スポーツの振興にも世界的にご活躍されました。

昭和三十五年、留学先の英国から帰国されるや、スポーツが身体障害者のリハビリテーションにとって極めて効果があるとの見地から、昭和三十六年全国に先がけて第一回大分県身体障害者体育大会を大分で開催され、昭的五十年には第一回極東南太平洋身体障害者スポーツ大会を誘致し、昭和五十六年の国際障害者年には、世界で初めての大分国際車椅子マラソン大会を開催するにあたり、先生の並々ならぬお力添えを頂きました。この大会も昨年の第三回大会では国際ストークマンデビル競技連盟の公認を受け、名実ともに世界で唯一の国際公認競技となり、車椅子マラソン発祥の地として世界に誇る大分県となりました。

まことに、先生の身体障害者リハビリテーションにかける情熱と卓越した発想、そして行動力は超人的なものがあり、その偉大な功績は日本国内はもとより世界の認めるところであります。

私は、今、物もゆたか、心もゆたかな新しい豊の国実現のため、一村一品運動やテクノポリス建設を進めると共にうるおいのある福祉のまちづくりの計画に着手しております。

去る七月十四日の福祉技術開発のための専門家会議には先生の貴重なご意見を賜わり、いよいよこれから大分県を世界の福祉県にするべく先生の識見、協力を多く期待していた矢先であり、まさに前途に光明を失った気持であります。

このうえは、先生のご遺志に報いるため、障害者福祉の一層の発展に全力を投ずることを霊前にお誓い申し上げます。

ここに、中村先生のご生前の偉業を讃えるとともに御霊の安らかな眠りを心からお祈りして、追悼のことばと致します。

先生さようなら。

九州大学整形外科教室教授

杉岡　洋一

この度の全く思いがけない先生との永久のお別れは九州大学整形外科学教室の一同にとりまして言いあらわす事の出来ない驚きと悲しみであります。

長い間整形外科、なかでも身体に障害を受けた方々の社会復帰にその全てを打ち込んで来られ、それらの方々に幸福で生きがいのある社会生活を送らせるための指導者として、また燈台として誠心誠意の日々を送られ、これからまた飛躍をという時期になぜ先にいってしまわれたのでしょうか。

九州大学医学部整形外科学教室ならびに同窓会を代表し心から惜別と哀悼の意を述べさせていただきます。

先生は旧制大分中学より九州大学医学専門部を昭和二十六年にご卒業になり、天児民和先生が主宰されます九州大学医学部整形外科学教室に入られ整形外科医としての道をふみだされました。このちち天児民和先生、九州労災病院長の内藤三郎先生より労働災害を受けた患者を可及的速やかに社会復帰せしめるための治療（特にリハビリテーション）についての薫陶を受けられたことが今日までの先生のお仕事の礎になったのであります。

昭和三十二年に九州大学医学部の文部教官に任ぜられ、合わせて整形外科教室のリハビリテーション部門でご活躍になり昭和三十四年には天児先生との共著で「リハビリテーション　医学的更生指導と理学的療法Ⅰ」という本を出版なさいました。今日ではリハビリテーションという言葉はありふれておりますが、当時は斬新な言葉でありま

して全国の医師にとって啓蒙的書物でありました。

昭和三十三年より四十四年まで国立別府病院整形外科医長を勤められ、この間昭和三十五年より英国国立脊髄損傷センター、ストークマンデビル病院のグッドマン先生の所にご留学され先生の脊髄損傷患者の治療方針であるグットマン方式をお持ち帰りになり、日本に紹介されるとともに自らこの治療に専念なさいました。ここに日本の新しい脊髄損傷患者の治療が始まったといっても過言ではありません。またここで先生が驚かれたのは下半身が麻痺した患者が車椅子でバスケットやテニスに興じたり、プールに飛び込む姿でありました。「身障者がどんな能力を失ったかは問題ではなく、どんな能力が残っているかが問題である。」というお考えのもとに先生は持ち前の行動力を遺憾無く発揮され、身体障害者のスポーツのために日本政府と東京都を動かして昭和三十九年に第二回パラリンピックの実現をみたのであります。

もう一つストークマンデビル病院で先生が驚かれたことは脊髄損傷の患者が六ヶ月後は社会復帰し、そのうちの八割が企業に就職していくことでした。英国の手厚い福祉制度に比べ、我が国では重度の障害者の多くは見離されているのが当時の現状でした。とにかく仕事を持ちたいとの彼らの声に先生は昭和四十一年これらの人々の自立を目指して「太陽の家」を創立なさいました。この「太陽の家」も完成の域に達し、更に「太陽の家」の理想を全国に広げるため愛知県にも「愛知太陽の家」が設立されました。

しかし先生は、今年一月朝日社会福祉賞を受賞された時、「太陽の家を出れば彼らは元の身障者に戻ってしまう。社会の福祉制度がまだ未熟だからです。福祉に終わりはありません。」とおっしゃられました。まだ社会の目が福祉に向けられなかった苦闘の時代を支え、現在の、またこれからの福祉の向かうべき方向をその実践のなかで示してこられた先生を今ここで失うことは誠に大きな損失であります。先生もまだまだこれからという時にさぞ心残りでございましょう。

しかしながら、先生の高邁な精神と情熱は先生から恩恵を受けた人々の体と心に生きつづけてゆくことでしょう。ここに先生が実践で示されました足跡を今後残りました我々が辿って前進させて行くことをお誓い申し上げます。

先生のご冥福と、ご遺族にご多幸をお祈りし、お別れの言葉と致します。

先生、安らかにお眠り下さい。

日本身体障害者スポーツ協会会長

葛西　嘉資

二十三日の朝、あなたの訃報を聞いた時は、全く驚かされ、ガッカリして暫く思考力を失いました。私より二十年も齢若く、いつも、私が身障者スポーツ協会の会長をしている間だけは、どんなことがあっても、必ずお手伝いしますと、私自身にも、また私の友人たちにも、よく話して下さっていた若いあなたの御霊前で、こうして私の方が、弔辞を申し述べねばならぬ逆の廻り合わせに全く悲しくて、やり切れません。

顧みれば、あなたとお近付き願ったのは、昭和三十六、七年頃だったと思う。私共が、東京パラリンピックをやるべく、準備を始めた時からです。

ストークマンデビル病院のグットマン博士の許で研修された経験をもつあなたは、何もかも一切不案内だった私共にとっては、唯一人の道標であり、力強い頼りでもありました。昭和三十八年の夏、ストークマンデビル病院内の宿舎の一室で、すき焼をつつきながら、東京大会の計画をどうするかと、語り合った時のことは、今でもハッキリ覚えています。

三十九年秋の東京パラリンピックでは、若かったあなたは、日本選手団の団長として、五十名のわが選手を引率して、その先頭を元気に行進されました。又あなたの恩師天児先生と共に、パラリンピックの時に開かれることとなっている国際脊損医学会専門家会議も、上手にこなして下さった御尽力も忘れられない一つです。

当時、国立別府病院の整形外科部長だったあな

たは、大会中の或る日、私に、自分は国立病院を辞めて、身障者スポーツに全力を挙げ、リハビリの仕事をやりたいと思っていると、御決意の程を洩らされました。そして間もなく、私が会長をしていた社会福祉事業振興会から、融資を受け、今日の太陽の家の在るあの土地を購入され、今日の太陽の家の輝かしい一歩が踏み出されました。太陽の家の素晴しい企画、積極的で独特の経営などに就ては、今更私などが申し上げる必要はありません。短期間に、よくこれ迄発展させてくれたものと、只あなたの神業のようなお仕事振りには頭が下がるばかりです。

東京パラリンピックから二十余年、身障者スポーツは、皇太子殿下、同妃両殿下のお励ましに依り、逐年発達を遂げて来ましたが、特に海外への選手派遣行事に就ては、あなたは大抵いつも団長として十数回海外遠征に加わられたほか、最近は私に代って、国際ストークマンデビル委員会の日本代表として、欠くことの出来ない方でありました。

あなたの飛び抜けた企画力、実に素晴しい決断力と何物をも恐れぬ実行力とは、何人も真似の出来ない独特のものでした。現に昭和五十年大分県で行われたフェスピックと呼ばれている極東・南太平洋身障者スポーツの第一回大会、昭和五十六年からやっている大分国際車椅子マラソン大会、及び本年四月愛知県蒲郡市で行われた第一回国際身障者レジャー・レクリエーション・スポーツ大会など、これらは何れも事実上あなたに依って推進されたものであり、身障者の国際行事として実を結び、又は結ぼうとしているものであります。又昭和五十一年東京で行われた第一回国際アビリンピック大会も、あなたを欠いては、あそこまで成功させることは出来なかったと思います。何れも素晴しい大仕事で、全く敬服の外ありません。

あなたは、二十年そこそこの短い間に、何人もの達人が一生涯かけても、やり切れないような沢山の大仕事を次々とみごとにやり遂げられました。それなのに、あなたは、まだあれもやらねばならぬ、これもやりたいという様な顔をして居られるような気がします。あなたは何物にも代えられない御自身の健康まで犠牲にされて、身障者スポーツ乃至福祉のために、全力を傾けられ、悉く成功させられました。もうあれだけやって頂ければ、それでもう十分ではありませんか。これからは、ゆっくりと静かに休んで下さい。今となっては、そう申し上げるより外ありません。

よくやって下さいました。ほんとうに有り難う中村先生。もう一度申し上げます。静かにお眠り下さい。さようなら。

大分県医師会会長
大分市医師会代表
吉川　暉

謹んで大分中村病院々長中村裕先生のご霊前に大分県医師会、大分市医師会を代表してお別れの言葉を申し上げます。先生には、最近ご健康も快復され、社会福祉にご尽力下さっていることを、新聞紙上などで承っておりましたのに、全く突然に先生の訃報に接し、その余りの唐突さに只々茫然として耳を疑いました。地域医療は勿論、社会福祉事業に言い尽せない数々のご功績を残され、これからもまだまだ大いにご活躍が期待されていましたのに、余りにも無情な事実に溢れ出る涙を抑えることが出来ません。ご遺族の皆様のご心中をお察しいたしますとき、お慰めの言葉もなく、只々、衷心より哀悼の意を表する次第であります。

先生は、昭和二十六年九州大学医学専門部をご卒業後、整形外科教室に入局され、九州大学医学部助手、国立別府病院整形外科医長をご歴任の後、昭和四十四年、大分中村病院々長として、より広く地域の方々の為にご尽力下さいました。

先生は、ご多忙な診療の傍ら別府整肢園々長、太陽の家理事長として、身体障害者の福祉と社会復帰のため身を粉にして奔走されました。

先生は、人の善意だけに期待した受け身の身障者福祉を強く否定され、身障者自身の努力次第で立派に社会人として自立出来るということを立証し、多くの人に、勇気と生き甲斐を与えられ、特に身障者のスポーツ振興に目を向けられ、多くの国際的なスポーツ選手団の団長として、また、第一回極東南太平洋身障者スポーツ大会、大分国際車椅子マラソン大会等を実現されるなど、身障者に注がれた情熱と実践活動に対し、大分市医師会は誇りと深甚なる敬意を表していた次第であります。

先生は、これらのご功績により毎日社会福祉顕彰、朝日福祉賞、県知事表彰、内閣総理大臣賞など数々の名誉ある表彰を受けられ、加えて最近はネパール国王からも勲章が授与されるなど先生のご功績は国の内外を問わずすぐれて高い評価と尊敬を得ておられました。

今、先生と幽明境を異にすることは、まことに心細いかぎりでありますが先生が与えて下さった

光は全国の、いや世界の人々によって受け継がれ、より明るい未来が築かれていくことと信じております。

どうか安らかにお眠り下さい。心から先生のご冥福をお祈りいたしまして、お別れの言葉といたします。

評論家

秋山ちえこ

中村先生、どうしてこんなに突然、急に、私たちの前から、姿を消してしまわれたか、私はどうしても信じられません。先生の御不幸を私はローマで聞きました。すぐに、いちばん早い飛行機をとって帰って参りましたが、ローマから日本までは二十時間かかりました。二十時間のその飛行機の中で、もしかしたら…… 先生は少年のようにいつもいたずらが好き、日本に帰って、大分にかけつけたら、〝ごめんごめん、今度はずいぶんおどかしたね〟と、ちょうどこのお写真のような笑顔でごめんごめんなんていって下さるのじゃないかと思って、帰って参りましたが、お宅に伺いましたら、もうひとつのあの箱の、骨壺の中に入った先生になっていらっしゃいました。

先生は、お医者さまとしても、素晴しい技量の持ち主、それから、障害者関係のお仕事を、もうとてもいいお仕事をなさいましたし、機械にもお強い。でも今度は、ひとつだけ、大きな計算違いをなさったように思います。今、日本人の寿命っていうのは、もう八十に近くなろうとしているんですよ、先生。どうして、その計算がおできにならなかったのか…… まだ、それまで二十数年あるじゃありませんか。どうして、こんな計算違いをなさるんでしょう。そして先生は、私は先生よりずっと年上ですけれども、数年後に大分へくれば、私の老後はちゃんと見てやるっておっしゃったじゃありませんか。それから、もうこんなに仕事を激しくするのを少しずつ控えて、今度はゆっくり外国へ遊びの旅行でいきましょうとおっしゃったこと、これもお忘れになっていらしたのでしょうか。

私は先生にうらみがましいことばかり申し上げましたけれども、悲しいからです。先生がいらっしゃらなくなったのが、ほんとうに、悲しゅうございます。でも、これだけ申しあげますと、ちょっと心が落ちついて参りますが……。

先生はこの二十年間、ほんとうによくお仕事というか、一生懸命、生きてらっしゃいました。ふつうの人の十倍、いや二十倍かもしれません。障害者に対するあの独創的な素晴しいお仕事ぶり、それからお家でも、ほんとうにいいだんな様で、ほんとうにいいお父様で、特に年老いた御両親に対しては、ほんとうに親孝行な息子さんでいらっしゃいました。日本の障害者だけでなく、世界の障害者のためにも、先生のお知恵と実行力というのは、もっともっと必要でありましたのに、早すぎます。私たちの前から、去ってしまわれたのは……。

今日もここで、皆様にお会いしましたけれども、ほんとうに男泣きに、〝これからどうする〟っておっしゃった方、何人もいらっしゃいましたが、〝先生がおやりになりたい、それからこうしなければならないという、いろんな残して下さったこと、それを守りましょうよ〟って、私は、私自身ももうこれから先どうしていいかわからないなんて思いながら、ひとさまの涙を見ると、励ましのことばをかけました。

今日、皆様が、安らかにお眠り下さいと弔辞をお読みになりましたが、私は、安らかに眠って頂きたくありません。これから、困ったことがあったら〝先生どうしましょう〟って手を合わせました時に、そのどうしましょうっていった人の耳もとで、右、左、とか、いろいろと、その人だけに聞こえる声で、何か御指示を頂きたいし、時々、天から窓を開けて〝おや、こりゃいけない〟と思ったら、何か御指示を頂きたい。あんまり安らかに眠らないで、いつまでも、私たちのために、何かアドバイスを頂きたい。そして、このお写真の笑顔はほんとに印象的で、そのお顔を思いながら、これからいろいろと、私のできるだけのことを、やっていきたいと思っておりますが、ここにおいでの皆様も、同じ気持ちだと思います。

ほんとうに先生、おつかれさまでした。

でも、まだ安らかには休んで頂きたくない。私たちを、これからもずっと助けて頂きたいということをお願いして、さよならも申し上げないで、失礼いたしたいと思います。

ありがとうございました。しばらく、お休み下さい。

ありがとうございました。

太陽の家従業員代表

吉松　時義

先生

今日は先生にお会いするために太陽の家の仲間たちが、こんなに多くやって参りました。

〝おい元気か、頑張れよ、身体に気をつけろよ〟と私達の身体のことを心配して下さっておりましたのに、その先生が逝ってしまわれたなんて、いまだに信じられません。

思い起こせば十九年前、一般社会に参加し働き生活することなど全く考えられなかったときに、「保護より機会を」をモットーに、身体に障害はあっても仕事を持ち自活し社会参加すべきだという信念で太陽の家を設立されました。

働く場のないものには働く場を、自立の出来る者には自立の道を、税金の消費者から納税者へ、一つ一つ着実な進歩がありました。

働きたくても働けなかった私達は、本当にはじめて働く喜びを得ました。身体に障害はあっても一人の人間として生きてゆきたい、その気持を良く分かって下さいました。

太陽の家の設立には当初いろいろと困難な問題が山積みし、社会の批判や誤解も多かったようです。それらのすべてを私共の常識を超えた情熱と努力で乗り越えて、常に前進あるのみでした。そして、建設の槌音は絶えることがありませんでした。

貧しかった当時をイカリマークの茶碗がそっと語ってくれます。わずか十名の車椅子の人達と共に小屋がけの中で竹細工の仕事を始めて十九年、太陽の家は素晴しく大きく発展して参りました。しかし先生は、いつも言われました。地域社会に感謝し初心に返って仕事に取り組もう、そしてよりよい社会づくりに健康者以上の貢献をしなければならないと。

中村先生！

あなたのいだいておられたビジョンの大きさ、深さは到底推し計ることも出来ません。今こうして先生の姿を失ってみて、現実の太陽の家の姿をあらためて見直しますとき、創設の頃の先生の計り知れない夢と計画を教えられるような気がいたします。その温かいお心と共に。

私共の知ることの出来ない世界に先生をお送りいたしました。二度とお姿を見ることもお声を聞くことも出来なくなりました。しかし先生は、私共一人一人の中に生きていて下さいます。仕事で困難に直面したときや、車椅子マラソンなどスポーツのときに〝頑張れ！負けるな、しっかりせんか！〟とかけて下さったあの声が、今も聞こえてくるようです。先生の遺されたその志を継承し、さらに発展させて行くことが先生の期待に応える私共の義務だと思います。先生、どうかこれからも私共とともにいて下さってお導き下さい。叱って下さい。怒鳴って下さい。

お悲しみと淋しさの中におられます奥様、御家族の皆様の上に天来のお慰めと平安が豊かにありますようお祈りいたします。

中村先生の霊。来りて私共のこの心、祈り、言葉をお受け下さい。

心より御冥福をお祈り申し上げます。

友人代表

吉村　元弘

おい、裕なぜお前一人死に急いだのか。夏の盛りの今日、お前の霊前で弔辞を読もうとは、余りにも非情な現実に涙涸れ果て身も心も遣り場のない思いだ。四十有余年の「おいこら」の深い深い交わりの日々が、そして若かりし日々がいま走馬燈のように目の前に浮かぶ。腕白、頑固、そして素朴なやさしさをもっていたお前、不可能を可能にする着想、思えば大分の、日本の、そして世界の中村の偉大な業績の下地は、すでにあの頃培われたものと思う。

学生時代、大分や福岡でお世話になった下宿の小母さん達を訪ね歩き、お礼を述べ慰める優しい一面も度々あった。この優しさ思いやりが、やがては病める人々へ、身障者の方々へと大きく展開し、社会福祉へ、太陽の家へと実を結ぶ。又戦時中学徒動員で徹夜作業をものともせず、血書を作り軍当局に差し出し忠君愛国のほとばしる情熱にかられた一時もあった。又医学生となり夏休みの二ヶ月余り一日中解剖室で只一人黙々と解剖の究明に取り組むお前の医学徒としての姿には学者を思わせる医師のきびしさがあり、友人ながらも畏敬の念を禁じ得なかった。かように若かりし日々のお前の思い出では、そしてエピソードは無限だ。

大分中村病院々長としてその職を全うしながら愈々年来の宿願であるリハビリ、身障者の社会復帰、そして太陽の家建設へと世界をまわり、今日身障者の父ともしたわれる中村裕、そのお前が天

の配剤とは申せ斯くも早く逝くとは惜しみても尚余りある。生者必滅会者定離とは申せ天を仰ぎて只涙あるのみ。発病二年有余、病んでも尚診療へ、太陽の家へ、車椅子マラソンへとお前の情熱はひたむきだった、吾が病気への腹立たしさを胸に秘め大きな目的に立ち向かってゆくお前の姿に人知れず涙する事も度々であった。栄ある数々の受賞をも誇りとせず、自分の病気への焦立ちに堪えてただひたすら身障者へ働く機会を、太陽をと進むお前の最後の姿が脳裏にやきつく思いだ。病状を知ってか、或いは予後を予期してか俺はすべき事はした、死んで悔いなしと、時に口に出し返事に窮する事もあった。余りの急変にご家族一同の悲しみは如何ばかりかと計り知れない。

でも裕よ、御子息の太郎君、英次郎君ももうすぐ医者となる、きっと立派な医者になるよ。そして畑田先生も居られる。どうか安心してご家族をしっかと見守ってほしい。

お前が逝って俺も何か死というものがこわくなった。又無限の世で二人再会しような。話しに行く所がなくなった、そして文句の言えるお前が居なくなった。やはり淋しい、悲しい。では裕よ、名残は尽きぬがお別れだ、さようなら安らかにお眠りください。

弔電

このたび、中村裕殿死去の趣、哀悼のいたり。生前の社会福祉に対する功績を称え、御冥福を祈ります。

常陸宮殿下

太陽の家理事長、中村裕氏の御逝去の報に接し謹んで哀悼の意を表します。あなたは、全国初の身体障害者福祉施設太陽の家を設立し、また第一回フェスピックや大分車椅子マラソン大会の開催に尽力されるなど、身体障害者の自立と福祉の向上にその生涯を捧げられました。

あなたが遺された偉大な御功績は、日本はもとより、全世界の認めるところであります。

永えに光輝くあなたの御遺徳を偲びつつ御霊の安らかな御冥福をお祈りいたします。

内閣総理大臣　中曽根康弘

御主人様の御逝去を悼み謹んでお悔やみ申し上げるとともに、心から御冥福をお祈りいたします。

外務大臣　安倍晋太郎

御主人様の御逝去を聞き驚きました。心から御冥福をお祈りいたします。

身体障害者雇用促進協会会長　青木勇之助

中村裕先生の御逝去の報に接し痛恨に耐えません。会員一同心からお悼み申し上げます。

日本パラプレジア医学会会長　赤津　隆

御主人様の御逝去を悼み謹んでおくやみ申し上げます。

日本電装株式会社取締役会長　平野　史

裕の訃報、とてもショックでした。私達はそして世界は中村先生を失い悲しみにくれています。心からおくやみを申し上げます。

リハビリテーション・インターナショナル
前事務総長　ノーマン・アクトン

中村先生の急逝を聞き、心から哀悼の意を表すとともに御家族の皆様にもお悼み申し上げます。先生は長年にわたって日本の身障福祉事業に多大な貢献をしました。生前は中国身障者福祉事業の向上に大変協力して戴きました。

先生の逝去は日本の身障者福祉関係ばかりでなく中国の身障福祉関係方面にも多大なる損失です。私共は先生をいつまでも忘れることなくその遺志を学んでいきたいと思います。

中国身障者福祉基金会副理事長　張　自寛

裕の逝去、心からお悼み申し上げます。心をこめて。

国際ストークマンデビル競技連盟
事務総長　ジョン・スクルートン

弔電　国内　三、三一七通
　　国外　九五通
総数　三、四一二通

麦には
きびしさがあります
麦は踏まれても
踏まれても
ぐんぐん成長します
太陽に向って
のびつづける
麦の形には
団結を
意味するものが
あります

発　行　　社会福祉法人　太陽の家
編　集　　追悼集編集委員会
印　刷　　電子印刷センター・太陽の家印刷科

表紙・書　羽田　春嶽／句　久米　祥生　　1984年12月25日